

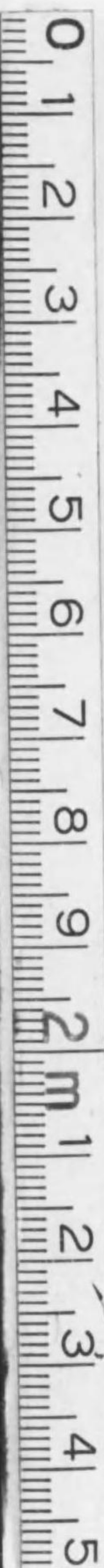
特252

695

建武前後の常總

茨城縣教育會發行

始



持252
695



の常總



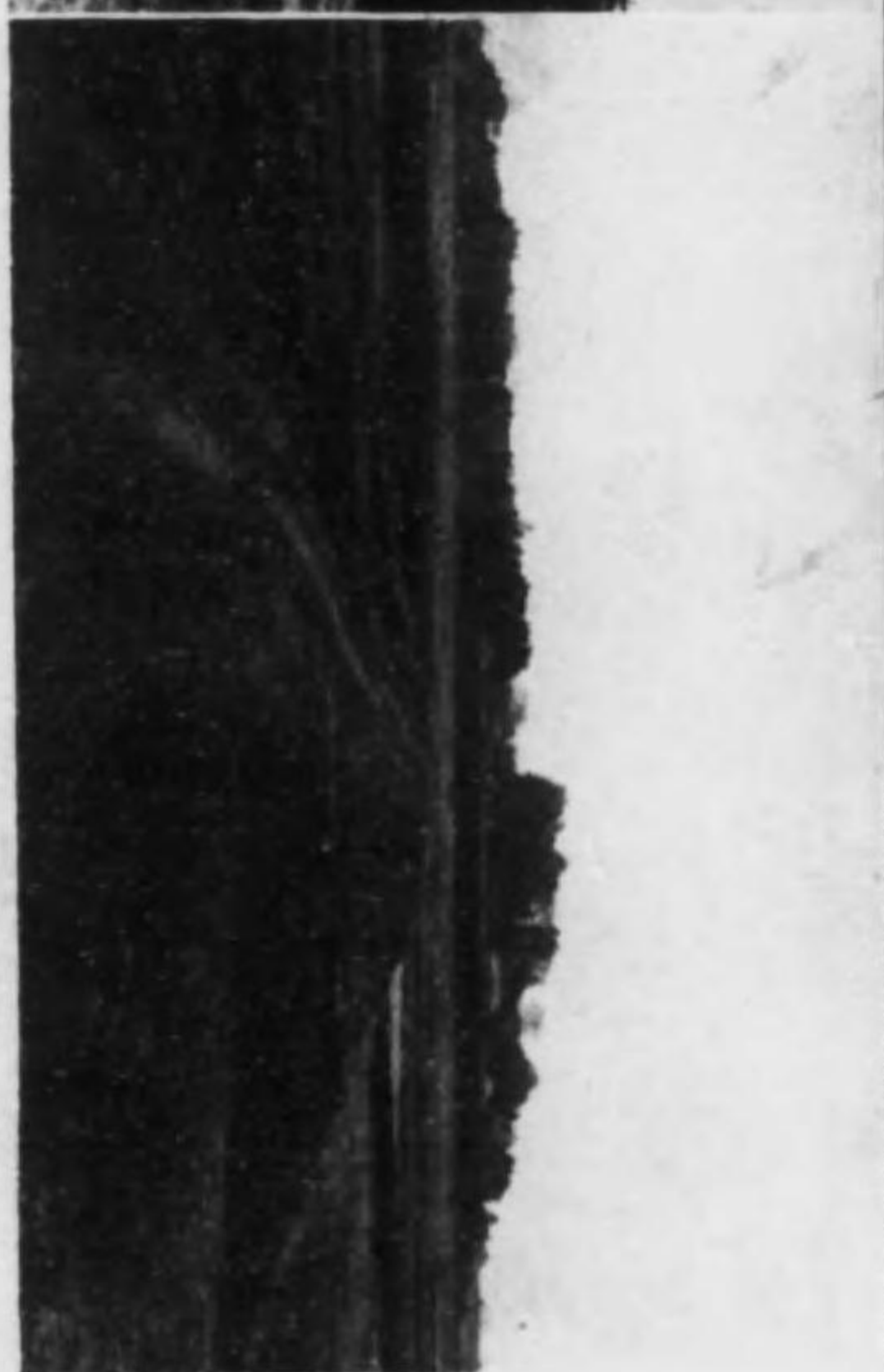
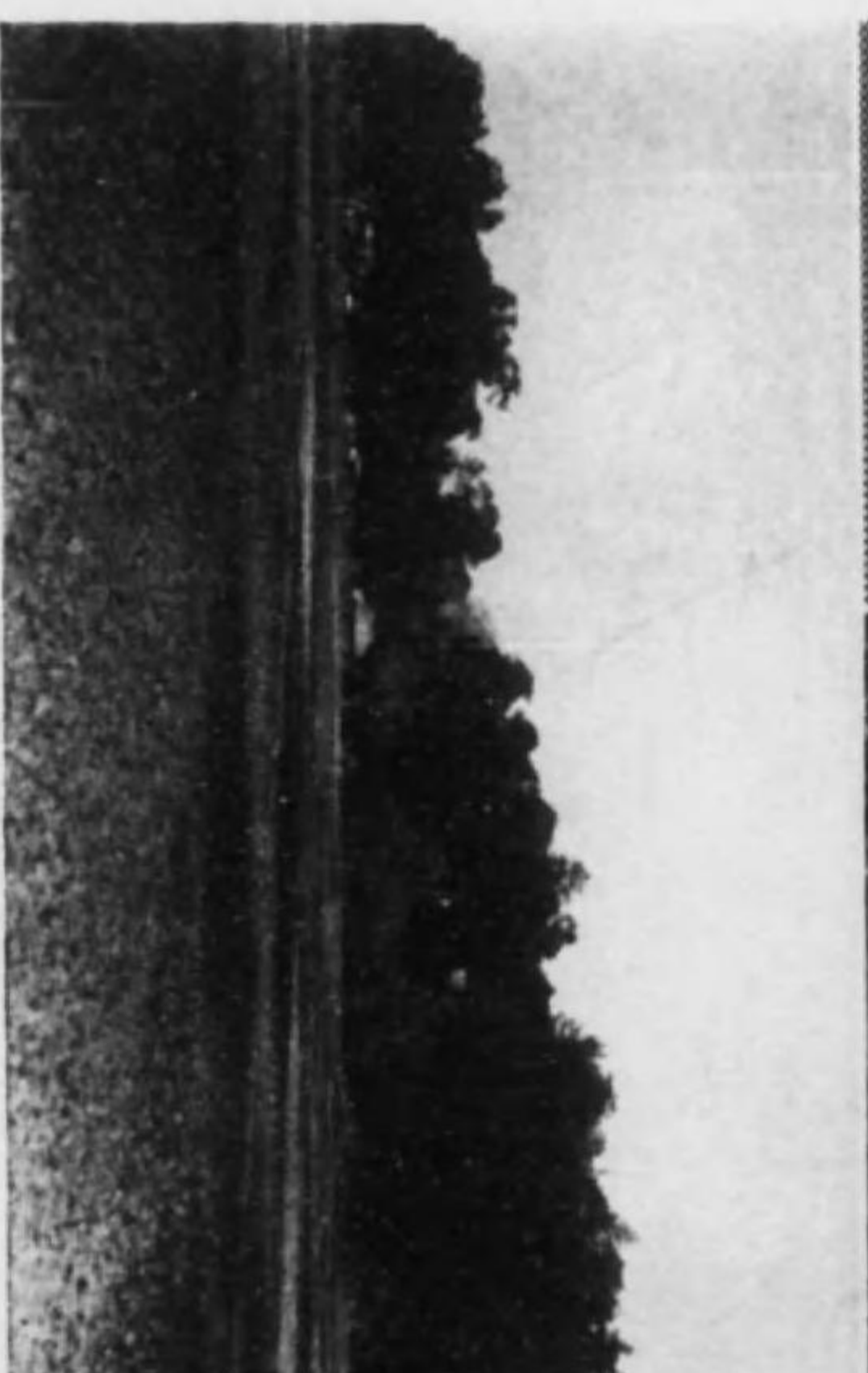
茨城縣教育會發行

茨城縣教育會發行

茨城縣の常盤

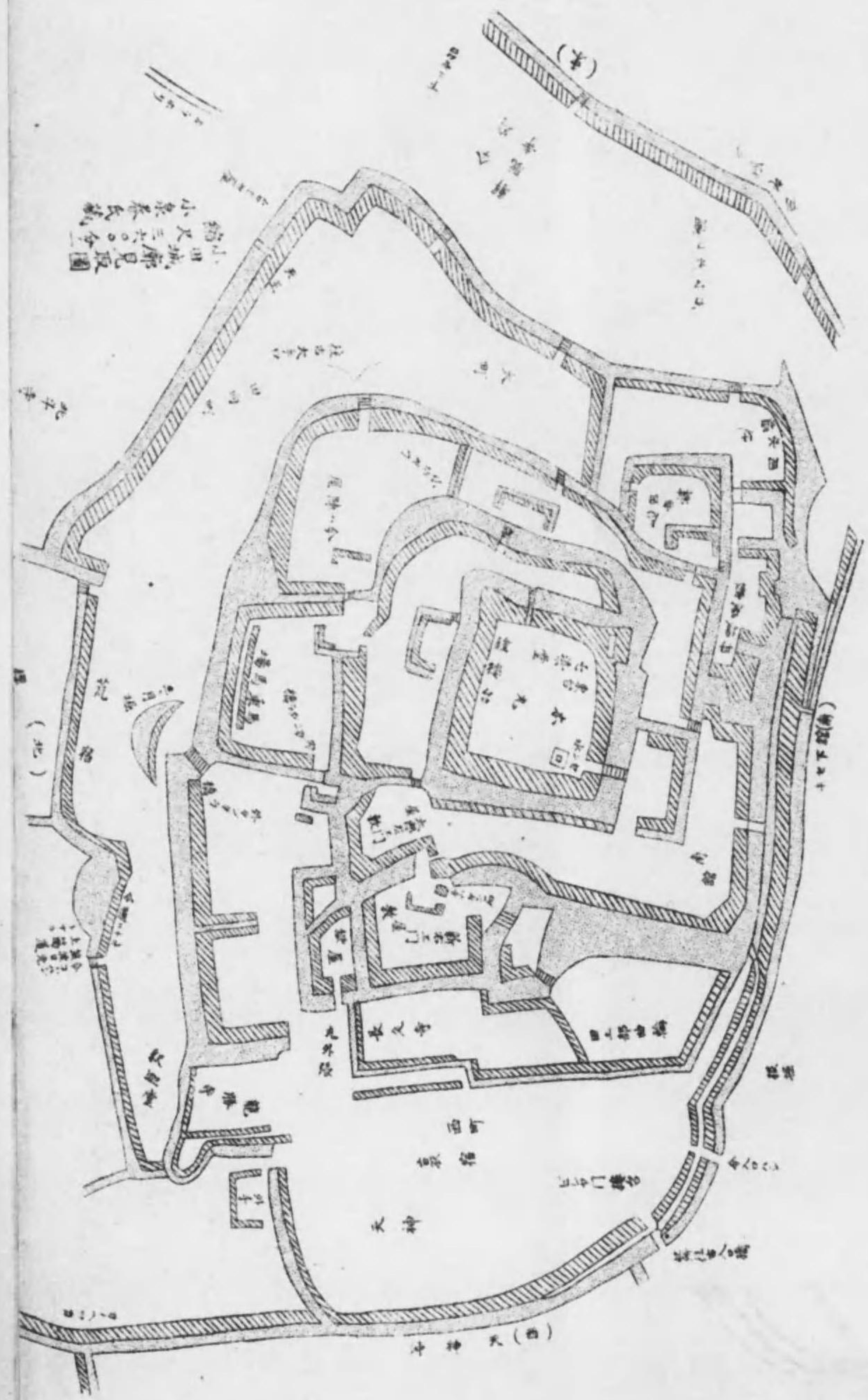


小城田小



大寶城址

關城址





子鏡







はしがき

今茲建武中興六百年記念を迎ふるに方り、畏くも後醍醐天皇の偉業、並に之を繼承し給へる御三代天皇の盛徳を景仰し奉り、併せて皇道陵夷の世克く獻替翼賛の忠誠を致したる勤王義烈の忠臣を追憶し、うたゝ感激に勝へざるものあり。乃ち謹みて報恩の誠悃を捧げ、更に現下の非常時に於ける國民精神作興に寄與せんが爲に、本會は縣及各種團體と相圖り、當時の忠臣に關係ある縣下の神社參拜及展墓並舊城址追弔を行ひ、尙記念講演會を開催する等の諸施設と相俟ちて、記念事業の趣旨を徹底せしめんが爲に、本書を發行して縣下各學校及各種團體に頒つ。終りに、本書發行に際し、特に玉稿を寄せられたる荒井庸夫氏に對し、厚く感謝の意を表す。

皇紀二千五百九十四年
昭和九年三月十三日

茨城縣教育會

昭和九年三月十三日
第百二十五次開會

會中報告

「茶城郷教育會」の報告書は、その内容が豊富で、且つその記載が正確である。本會は、本年は恰も建武中興六百年に該當し、記念の式典等が行はるゝにより、聊かその参考に資するため、急に印刷に附することゝなつた次第である。

二、本書中北畠親房郷に關する記事については、故宮本茶村氏の『關城釋史』に負ふ所が最も多い。特記して故賢に對する感謝の意を明かにする。

三、未定稿のままて發表を急いだため、意に充たぬ点が隨所に散見するのみならず、誤謬も少くない事と思ふ。諸賢の嚴重なる批正を賜はらば幸福之に過ぎない。

四、讀者の參考のため略圖一葉を添へた。大略の位置を示だけのものである。

おしほき

凡 例

- 一、本小冊子は、余の編者『豪族時代の常總』（未定稿）中の第三編第一章から第六章までを引抜いたもので、本年は恰も建武中興六百年に該當し、記念の式典等が行はるゝにより、聊かその参考に資するため、急に印刷に附することゝなつた次第である。
- 二、本書中北畠親房郷に關する記事については、故宮本茶村氏の『關城釋史』に負ふ所が最も多い。特記して故賢に對する感謝の意を明かにする。
- 三、未定稿のままて發表を急いだため、意に充たぬ点が隨所に散見するのみならず、誤謬も少くない事と思ふ。諸賢の嚴重なる批正を賜はらば幸福之に過ぎない。
- 四、讀者の參考のため略圖一葉を添へた。大略の位置を示だけのものである。

昭和九年二月

編 著 者 識

- 四、鎌倉幕府の成立と建武中興の失敗………
- 五、建武中興の失敗とその原因………
- 六、建武中興の失敗とその結果………
- 七、建武中興の失敗とその影響………
- 八、建武中興の失敗とその歴史的地位………
- 九、建武中興の失敗とその教訓………
- 一〇、建武中興の失敗とその研究の方向………
- 一一、建武中興の失敗とその研究の方法………
- 一二、建武中興の失敗とその研究の意義………
- 一三、建武中興の失敗とその研究の展望………

目次

建武前後の足利

目次

- 第一章 鎌倉幕府の崩壊……………一
- 第二章 中興政治の幻滅……………九
- 第三章 足利尊氏の叛……………一五
- 第四章 常陸勤王軍の奮闘……………三三
- 第五章 北畠親房卿と小田城……………三三
- 第六章 親房卿と關城及大寶城……………四七

以上

目 次

第一章 鎌倉幕府の崩壊

第二章 建武中興の経緯

第三章 建武中興の経緯

第四章 建武中興の経緯

第五章 建武中興の経緯

第六章 建武中興の経緯

第七章 建武中興の経緯

第八章 建武中興の経緯

第九章 建武中興の経緯

第十章 建武中興の経緯

建武前後の常總

荒井庸夫編著

第一章 鎌倉幕府の崩壊

後醍醐天皇 文保二年(一九七八)二月、後醍醐天皇御齡三十一歳にして御位に即かせ給ひ、後鳥羽天皇以来の御遺志を繼ぎ、幕府を倒して大權を恢復遊ばさるゝ御志堅く、元亨元年(一九八二)記録所を復興して親しく訟を聴き、銳意民治を勵ませ給うた。時に鎌倉では北條高時執權の地位にあつたが、昏愚にして奢侈を好み、嬖臣長崎高資權を専らにし、賄賂を貪つて暴政を行つたから、幕府は衆怨の府となり、諸國武士中、竊かに心を天皇に寄せ奉る者も起つて來た。

正中の變 かくて天皇は氣運の動きを察し給ひ、藤原資朝、同俊基等と北條討滅の議を進め給ひ、竊かに諸國の武士を召させられ、美濃國の住人土岐頼兼、多治見國長等徴に應じて入京したが、正中元年(一九八四)九月事洩れ、高時は兵を遣はして頼兼、國長等を殺し、資朝、俊基を捕

へて鎌倉に送らしめ、事態甚だ急迫に陥つた。天皇は藤原資朝を鎌倉に遣はし、事は資朝等だけの取計ひで、天皇の全く關知し給はざる所であり、北條氏に對して他意あらせられぬ旨誓書を賜うて事難なく治まり、翌二年(一九八五)高時は資朝を佐渡に流し、俊基を京に還した。但し天皇はこれに依つて北條討滅の御志を棄てさせられたのでは無かつた。

元弘の亂 其後嘉曆元年(一九八六)皇太子冊立の事について、鎌倉では兩統迭立の議を權に取つて、天皇の詔を奉じながつた爲に、朝幕の關係再び惡化し、同三年(一九八八)には尊雲、尊澄兩法親王を天台座主として、延曆寺及南都の僧兵を延き、爾來藤原俊基等密旨を奉じて盛に其間に活躍し、再び鎌倉討伐の密謀が進められた。元弘元年(一九九一)五月謀再び洩れ、兼て高時呪咀の儀に預つた僧圓觀、文觀等が鎌倉に拘送せられ、やがて七月には六波羅の兵が禁中を犯し、藤原俊基を捕へて鎌倉に送つた。天皇嚇怒して諸國に勤王の兵を徵し給うたが、鎌倉では八月二階堂貞藤等に命じ、急遽三千騎の兵を率ゐて京都に攻め上らせだ。天皇は高時が廢立を行はうとする底意あるを察知し給ひ、神器を奉じ、藤原師賢、藤原藤房等と、一旦叡山に幸し、やがて笠置に遷らせ給ひ、河内の武士楠木正成を召して興復の大事を委託し給うたが、其中に大佛貞直、金澤貞冬、足利高氏等賊の大軍笠置を圍み、天皇は終に賊軍に囚れの御身となり給うたのであつた。

楠木正成の擧兵 此時楠木正成は逸早く勤王の兵を赤坂に擧げたので、大軍は更に進んで之を圍み、三十萬の兵が僅か五百の城兵に惱まされ、惡戰苦闘の未漸く之を陥れたが、其時は正成が城

を去つて更に第二の計畫を進めたので。正成の此健闘は、諸國の勤王軍を奮起せしむるに十分であつた。而して鎌倉の直參たる常總武士中幕軍に屬して此戰に加はつた者は、佐竹貞義、小田治久、緒城朝祐、千葉貞胤並にそれ等の一族であつた。

天皇隠岐遷幸 かくて貞直以下幕軍の大部は間も無く鎌倉に引揚げ、而して事變の處置としては、承久の例を追うて天皇を御位から下し奉り、持明院統の光嚴院を擁立し、翌元弘二年(一九九二)三月天皇を隠岐に遷し奉つた。此時小田治久は佐々木高氏、小山秀朝、千葉貞胤等と、天皇を隠岐に護送し奉つたのであつた。尙鎌倉では事に預つた重なる公卿の罪を斷し、五月僧圓觀を陸奥に、同文觀を南島に、藤原師賢を下總に、同藤房を常陸に、同季房を下野に流し、六月藤原資朝、俊基等を殺した。藤房は小田治久之を預り、領内の藤澤城(新治郡藤澤村)内に置いたのである。

正成の再擧 併し時勢はもはや承久では無かつた。此年四月楠木正成は再び兵を赤坂に擧げて和泉、河内を徇へ、五月には六波羅の兵を四天王寺に擊破して大に氣勢を揚げ、更に此年の冬に入つては、正成は千劍破城に旗を翻し、更に護良親王は吉野に據つて、令旨を諸國武士に下し、赤松則村率先之に應じて兵を播磨に擧げ、京に迫る形勢を示したので、幕府は此報を得て大に驚き、翌元弘三年(一九九三)二月、阿曾時治、二階堂貞藤等に、兵を授けて西上せしめ、同時に三城を圍ませた。かくて赤坂は此月に、吉野は翌閏二月に相次で陥つたけれども、正成の千劍破城は幕府の大軍を物ともせず、屢之を擊破して愈氣勢を揚げたので、中國、四國、九州一帯に義軍續々として

競ひ起り、最早や收拾すべからざる形勢に陥つた。護良親王の活躍 親王が吉野を脱出せられて後の御活躍は一層目覚ましいものがあり、密使を諸國に走らせて令旨を傳へ、勤王の士を徴されたのみならず、義軍並起の状況を、巨細に隠岐の行宮に報ぜられた。この結果は天皇警護の武士の間にも勤王の念を喚起し、同二月の末には、天皇は隠岐を脱して伯耆に遷幸せられ、名和長年が船上山に迎へ奉り、鹽谷高貞等來歸し、天皇は此處から高時追討の綸旨を諸國に下し給ふ情勢にまで進展した。特に親王の令旨は八方に飛び、近畿以西は言ふに及ばず、千劍破攻圍中の東國勢、六波羅警備中の關東武士や、遠くは幕府の膝元たる鎌倉にまで到達して、勤王の氣勢を煽つたのである。新田義貞が三月十一日大塔宮の令旨を受け、虛病を構へて千劍破の攻圍軍を離れ、鎌倉攻伐の決意を以て歸國した事や、結城親光が義貞と同時に京都六波羅に於て同様の令旨を受け、十五日赤松則村が山崎に進撃した際、之に就て歸順した事や、其父の宗廣が鎌倉に於て三月十五日宮の令旨を受け、且之と前後して天皇の綸旨を戴き、愈決心を堅めた事などは顯著な例であつて、幕府崩壞の氣運既に熟し、其實現は唯時の問題として殘されたに過ぎなかつた。

足利高氏の野心 鎌倉と六波羅との間には急使織るが如く、刻々形勢の切迫を報告して來るので、幕府は大に狼狽し、更に名越高家、足利高氏兩將に命じ、第二軍を率ゐて西上の途に就かしめた。慧敏なる高氏は時勢の推移を洞察し、此時既に北條を斃して已取て代らうとの野望を胸中に秘

め、三月廿三日鎌倉を發し、東海道を京都に向つた。彼の野心は三河國八橋驛に進軍した際、同族吉良貞義に謀叛の企を打開け、其賞讃を得たことに依つて昵近者の間に明瞭になつた。而して此賞讃は、高氏の地位名望から見ても、此際に於ける此企は、我國多數武士の希望に最もよく合致した意味を現はしたものであつた。依つて高氏は密使を船上山に走らして歸順の意を通じ、近江國鏡驛で綸旨を拜し、四月十六日何喰はぬ顔で入京したのであつた。

高氏の入京 時に六波羅勢は、北條仲時、同時益之を率ゐ、京都内外の警衛に當つて居たのであるが、これ迄再々京都を窺ふ赤松勢を撃退したとはいへ、猛將結城親光が手兵を抜いて山崎に去つて後は、軍中に續々脱走者を見、勢日に蹙まるの苦境に陥つた。而して京の外を見ると、千劍破の正成は依然頑強なる抵抗を續けて、目に餘る關東勢を惱まし、中國四國九州の一帶は殆んど勤王軍を以て充され、全く孤立無援の情勢に陥つた際として、高家高氏等の入京は、一時六波羅勢に聊か安心の胸を撫で下させたのであつた。併し高氏は此時は唯旗揚げの時機を窺つて居たので、表面は忠順なる關東軍の一將を粧ひ、裏面では書を其同族並に所縁の諸豪に寄せ、其決意を示して合力を勧め、かくて滯京十日の後、四月廿七日高家は山陽道、高氏は山陰道と、二手に別れて船上山へと進發したのである。

高氏六波羅を滅す 其日年少氣鋭の高家は、忽ち則村親光等の官軍と衝突し、激戦の後敢へなく久我暁の露と消えた。高氏は友軍の惨敗に眼も呉れず、進んで其所領たる丹波の篠山に入り、

八幡宮に祈願を籠めて、此處で愈勤王の旗上げを決行した。高家戦死、高氏謀叛の飛報は、彼等を持ち切つた六波羅、並鎌倉上下の顔色を失はしめた事は察するに餘りある。かくて高氏は暫く其地にあつて兵力の集結に日を費し、五月七日官軍の將源忠顯、赤松則村等と並び進んで六波羅を攻め一舉に之を陥れた。仲時、時益等は、光嚴院其他の高貴を奉じて近江に遁れたが忽ち殺戮せられ、多年に亘つて京を壓して居た兩六波羅館の威力も、かくして根柢が覆されて了つたのみならず、此報は忽ち波濤の如く地方に擴まり、十日千劍破攻圍の關東勢も土崩瓦解して了つたのである。

新田義貞の擧兵 護良親王の令旨を受けて歸國した新田義貞は密に族類を糾合して擧兵の準備を整へた。時に鎌倉では京に入つた高家等の軍が大敗したとの報に、更に大兵を増派することに決し、その爲軍用金を關東諸國に課し、而して新田氏には、特に富豪であるからとて、錢六萬貫を割當て、且五日を限つて督促したので、義貞は激怒して幕吏を斬り、之を機會に生品明神の祠前に大塔宮の令旨を掲げ、高時追討の旗を揚げた。それは五月八日の事で、豫て北條一家を見放した關東の諸豪は、一齊に立つて之に應じ、翌九日武藏に出陣の際は、高氏の嫡男千壽王丸が郎黨に護られ、兵三百を以て來會した外小田、大塚、結城、宇都宮等兩毛、常總諸國の兵、早くも二萬餘騎を得、鎌倉勢と入間川に戦つて之を破り、其翌十日更に久米河に敵を破つて大に氣勢を揚げたのである。

義貞鎌倉に迫る かくて義貞の勤王軍は日々に増大し、十五日分倍河原に優勢なる幕軍と會戦

して一度敗退したけれども、相模の三浦の族大多和義勝が味方に駆け參じたに依つて、其勢増して十萬餘騎となり、分倍の鎌倉勢の勝利の油斷に乗じ、十六日黎明不意に三面から合撃して之を潰滅に歸せしめ、敵の總帥北條泰家を走らし、是と同時に義貞に應じて起つた小山秀朝、千葉貞胤等の軍は、鎌倉の副將金澤貞將の軍を鶴見に破つて義貞の軍に合し、更に結城宗廣の一族が鎌倉から兵を抜いて來り會し、勤王軍の勢益振つた。爾來兵數は刻々に増加して、十八日鎌倉の周圍を取巻いて、攻撃を開始した時には、總勢八十萬に上つたといふが、これはやゝ誇張に失するかと思はれる。

北條氏の滅亡 五月十八日から二十二日にかけての鎌倉攻防戦は、慘烈を極めたものであつた。假令衰へたりとはいへ、日本武士の首領と呼ばれた執權の一族、多年鍛へた武士道の精神に變りは無く、敵も味方も名を重んじて一步も退かず、惡戦苦闘の限りを盡したのであつたが、大勢既に如何ともし難く、二十二日高時を始め一族四十二人、門葉二百八十八人、葛西谷で自殺し、執權政治は茲に一場の夢と消え去つた。頼朝が幕府を開いてから、丁度百五十年目に當るのも一奇である。義貞は直に鎌倉平定の旨の奏狀を認め、使者三人を走らして之を行宮に奉つたのである。

政治的危機 執權北條氏の勢力は、かくして東西殆んど同時に潰滅に歸した。これは主として地方武士の勤王の結果であつたことは言ふ迄も無い。併し是等多勢の勤王軍中、眞に勤王の精神に終始した者が果して幾人あつたであらうか。實に彼等の大部は、時代の變革に乗じ、一廉の功名手柄を立て、恩賞に預つて家門の繁榮を圖るに急な所から、北條の没落近しと見て取つた彼等は、

相互間の私憤や不和などは暫く差措いて、先を争うて勤王の旗の下に駆け参じたに過ぎないので、素より秩序も統制も缺如して居た。従て彼等はこれ迄其上に臨んだ幕府を倒し、壓力の根元を除き去つた曉、次の重壓が其頭上に加はらざる限り、彼等は再び仲悪き隣人の状態に立返り、公々然無制限な私闘を始めぬとは保證されないので、北條氏の滅亡は、我國の地方をして、動もすれば無政府状態に陥るの危険に暴露せしめたのであつた。

足利高氏の暗躍 此状態は梟雄足利高氏の夙に看て取つた所である。彼が六波羅政廳を占領するや、早くも其屬僚たりし長井、小國等の族人を其まゝ任用し、奉行所を置いて六波羅の政務を引継ぎ、所謂御教書を發して諸國の兵を召集し、公務を沙汰し、居然として將軍政治の繼承者を以て自ら任じた。勤王の旗の下に續々と京に聚つた諸將士の眼が、僅に本領安堵、領地加増乃至恢復等自家頭上の問題に躊躇するに過ぎざる者の大多數であつた間に立つて、秩序の維持、武人の統制、乃至人民の救済等の大局に着眼して、暗中飛躍の一步を踏み出した彼の態度は、眞に恐るべきものがあつたのである。

新田足利の確執 尊氏は又其族人に命じ、嫡男千壽王丸を擁して鎌倉追討軍に参加せしめた事は前に述べた通りであるが、齡僅に四歳の御曹司は、暫く戦塵を下野の足利に避け、鎌倉の平定を待つて、六月二日大藏谷の自邸に入つた。然るに今迄義貞の旗下に屬し、其指揮命令を受けて功名を競うた同盟の諸將士は、忽ち手の裏を返す様に義貞を棄て、足利御曹司の邸に祇候して其部下となり、暗に尊氏の執成しによつて、恩賞の少しでも多からんことを望む様な、淺ましい態度を示したので、義貞の憤激其極に達し、あはや新田足利兩氏の間、血の雨を降らさん計りの危機に臨んだが、義貞の陰忍によつて辛くも無事に收まり、やがて義貞は手兵を抜いて京都に上つた。鎌倉では其時京から高氏の旨を受けて下つた族人細川和氏頼春等が千壽王(義詮)を擁し、引續き其名に於て關東の政治を行ひ、之に依つて幕府の繼承者は、正に足利氏たるを示したので、決死的冒險に依つて鎌倉を陥れた義貞の功績は、其實質を擧げて悉く高氏に奪ひ去られたのであつた。

第二章 中興政治の幻滅

天皇 還幸 六波羅陥落の報が船上山に達したのは、五月の十二日であつた。天皇は其月の廿三日船上を發して還幸の途につかせ給ひ、六月一日兵庫に於て鎌倉平定の捷報を受けさせ給ひ翌二日楠木正成に調を賜ひ、其先驅を以て四日御入京、五日還幸の儀を以て宮に入らせ給うた。此事を相前後して長門探題北條時直、九州探題同英時等も滅亡し、捷報は六月七日京に達し、僧圓觀文觀等もやがて配所から歸京した。小田治久が藤原藤房を護衛して上京したのも此時のことであつた。かくして全國津々浦々の果に至る迄、錦の旗風に靡かぬ草も無き有様で、天皇は承久以來百年の御怨を散じ給ひ、久しく政權に離れた公卿の面々も、世は再び天皇を中心とした昔の政治に立返つた

ものと喜び合つたが、それははかなき幻に過ぎなかつた。

足利對非足利黨の暗闘 天皇の還御し給ふや、先第一に足利高氏の勢力が、蔚然として諸大名を壓して居た状況を御覽じた事であらう。彼は既に六波羅の事務を引繼いで、京都政刑の權を其掌裡に收め、尙鎌倉の政治を引繼いで關東の士心を收攬したのみならず、諸國大名も相率ゐて彼の門に馬を繋ぎ、其被管たるに甘んずる有様は顯著であつた。護良親王が入京せられたのは、六月十三日の事であつたが、早くも此狀勢を看取し、この儘に放置すれば第二の頼朝を生ずるは明かであるから、先第一に彼高氏を除くにあらざれば、王政復古の大業を成すことは望まれぬ旨を痛論せられたのであつた。天皇は漸く人心の定まつた、此際に表面功あつて罪無き者を誅罰して、再び士心の離反を招く様な事端を生ずることを好ませられず、強ひて親王を慰撫して一旦思ひ止らせ、特に親王を征夷大將軍に拜して諸大名の上に臨ましめ、之に依つて武家の棟梁は足利高氏では無く、實に親王將軍たるを明示し給うた。時に楠木正成、新田義貞、名和長年等も既に高氏の遠大なる野心を看破し、之を討滅する必要を痛感したのであるが、足利一族の勢力強大にして、到底獨力若くは二三の聯合位では成功覺束なく、無念を忍んで手を下すことを差控へて居た。されば親王は深く彼等と氣脈を通じ、機を見て高氏を除かうと謀り、高氏亦此氣勢を察して、對抗の策を怠らなかつたので京の首腦の間には、新政の開始以前、早くも足利非足利の兩派が對立し、日々暗闘を繰返し、此間に處する天皇の御苦心は、實に想像の外であらせられたのである。

奥羽經營 此年十月參議左近衛中將北畠顯家を陸奥守とし、義良親王を奉じて陸奥出羽を鎮せしめた。時に顯家十八歳、親王は僅に五歳であらせられたから、萬事は顯家の父親房入道宗玄の後見に委任せられた次第であつた。而して特に前の鎌倉親王將軍の例に準じ、其下に評定衆、引付衆、侍所等を置いて政務を統轄せしめ、評定衆には源宗房、藤原英房等の公卿の外、結城宗廣親朝父子伊達行朝等奥羽の豪族を挙げ、引付衆には前に六波羅にあつて政務に練達した小田時知等を補せられた。これは護良親王の献策により、奥羽を打つて一丸として關東から分立せしめ、之に依つて足利の勢力を後方から牽制しようとしたものである。而も足利の感情を和ぐる意味に於て、十二月末高氏の弟直義を相摸守に任じ、上野大守成良親王を奉じ、鎌倉に駐つて關東を鎮せしめた。かくて關東は從來足利千壽王(義詮)の名に於て經營せられた政務が其まゝ直義の手に移され、爾來直義は得意の政治的手腕を振つて關東の士心を攬り、制令總て北條氏の舊例に則つたため、關東一帯は漸く其堵に安んじたのであつた。

建武新政 天皇は御還幸の後、間も無く記録所を復興し、大事は天皇御親臨の上之を決し給ひ、既に此時を以て新政を始め給うたのであるが、翌建武元年(一九九四)新に中央政府として雜訴決斷所侍所及武者所を置き、大に武家政治の制を加味した新政を布かれたのであつた。第一の雜訴決斷所は初めは主として公家之に當り、後には武士も參加して、將士恩賞の事を始め、領地、年貢等に關する訴を決する重要政務に當り、第二の侍所は足利高氏所司として、軍政及京都の刑獄

を司り、第三の武者所は天皇の御親兵で、新田氏が其頭人であつた。

新政の弱点 而して新政の骨髓をなす雜訴決斷所の決定は、其本質として背後に絶對的の威力を負ひ、武士等をして一言なく服従せしむるもので無ければならなかつたのに、今次の變革は事實公家が其力によつて武士を屈服せしめたものでは無く、却て武士の力を借りて、彼等の頭目を排除せしめたものであつたから、上流に立つ公家は、職權を與へられても、之を遂行する威力を有せず、爲に政治上の重大問題たる刑賞の事も其獨斷を以ては決せられず、勢ひ武人と相談し、其諒解を得ざれば施行が出来ず、從て公家の期待した多年の希望も、何一つ實現されず、極めて不平不満の感を抑へて月日を送らざるを得なかつた。而も新政に對する不満は、單に公家のみに留らず、武士も亦同様であつて、彼等は恩賞が公家被管に厚くして武士に薄かつた事、其恩賞が公廳に議せられずして内奏によつて決せらるゝものゝ多い事、公家被管の輩が驕傲にして武人を輕侮すること等を憤ほり、特に其大部分は、唯一の希望たる恩賞に預れないため、滿腹の不平を懷いて新政を呪ふのであつた。此時此難局を救ふものは、武士等を壓倒すべき背後の力と、國土民人を塗炭の苦から救はうとする熱誠の外に何者も無い。而して建武新政の中心には遺憾ながら此兩者が缺けて居た。藤原藤房は此狀勢を見るに忍びず、天皇に對し率り、屢侃々諤々の諫言を上つたのであるが、天皇が終に之を容れさせ給ふ御決心も見えないので、十月決然官を棄て、山野に放浪し、終に其行衛を晦まして了つた。

常陸勤王の倡首藤房卿 顧みれば卿の常陸藤澤に留つたのは元弘二年六月から、翌三年の五月迄で、その間僅に一ヶ年に過ぎない。しかも此間小田父子が卿を特別の賓客として迎へ、十分鄭重に待遇した事は、卿が上京に際し、遺髪を記念に留め、小田氏が後之を塚に納めて、今日尙「髮塔塚」として城址に存することに依つて明かである。時代の先覺者にして尊王の熱情に燃ゆる卿が藤澤の一年を唯無爲に送つたとは思はれぬ。必ずや機會を捉へて尊王の大義を説き、その崇高な人格が深い感化を接觸者に與へずには居なかつたであらう。新田義貞の舉兵に際して小田、大椽等の諸族が翕然其手に驅け參じた事や、建武以後の動亂に當つて小田を中心とする周圍の諸族が、一致して勤王軍に加はつた事など、既に此時藤房卿によつて播かれた種子が芽生えたものと見なければならぬ。更に之を嚮に僧圓觀を預つた結城宗廣、藤原師賢を預つた千葉貞胤等が打揃うて足利反對黨に投じた事實に徴し、その由來の偶然ならざるを思はしめる。然るに卿が建武元年十月京都を退散した後、杳として消息を絶ち、六百年後の今日に至るまで、不明のまゝになつて居るのは、洵に痛ましき限である。その終焉の地と稱するもの山城、伊勢、近江、伊豆、下野、常陸、筑後、羽後、美作等の諸國に散在するが、確實なものは一つも無い。從つて卿の靈は今尙ほ護國の神として祀られて居らず、その同志たる師賢卿が小御門神社として別格官幣社に列せらるゝに比し、相違の甚しいものがある。常陸の藤澤は忠臣藤房卿の遺徳を顯彰する絶好の場所では無いか。卿の忠誠に共鳴喚起し、後北畠親房卿を輔けて國體擁護の爲に闘つた常陸人の子孫は、この点に關し、必ずや

祖先の志を成す所以を思ひ、奮つてその道を講ずるであらうことを、吾人は信じて疑はざるものである。

二條河原の落書 建武年間記に載つて居る二條河原の落書中に次の様な文句が見えて居る。

この頃都にはやる物、
夜討強盜謀論旨、
召人早馬虚騒動、

生頭遺俗自由出家、
俄大名迷ひ者、
安堵恩賞虚軍、

本領はなるゝ訴訟人、
文書入たる細葛、
追従讒人禪律僧、

下克上する成出者、
器用の堪否沙汰もなく、
もるゝ人なき決断所、

着つけぬ冠上のきぬ、
持もならはぬ笏持て、
内裏まじはり珍しや、

賢者がほなる傳奏は、
我もゝと見ゆれ共、
巧なりける詐は、

愚なるにや劣るらん、云々

當年の亂雜極まる京都の狀勢、眞に見るが如きものがある。

尊氏護良親王を陥る 足利高氏は天皇還幸の後、戦功第一と稱せられ、且片諱を賜はつて尊氏と改名した。さてかく武士等の不平が日に高まるに連れ、彼等は相率ゐて足利氏の傘下に投じ、従て高氏の勢は日を追うて増大し、それにつれて非足利黨の首領たる護良親王との間柄は更に險惡なる狀勢を加へた。藤房が官を辭して去つた後間もなく、兩黨の軋轢終に爆發し、親王は囚れの身となり、次で鎌倉に流された。此事件は表面尊氏の讒言によつた事になつて居るのであるが、天皇が尊

氏の野望については既に十分存知せられて居り、且天皇と親王と御父子の間には、極めて密接微妙なる關係があらせられたので、其真相は恐らく親王が此事件の犠牲となり、天皇の御身替りとして罪を一身に擔はれた次第と見るが妥當であらう。尊氏其人は前の頼朝の如く時の群雄を駕御して、彼等を驅使するだけの識量があつたか如何かは疑はしいが、周圍の狀況は、時の群雄を驅つて彼を已等の棟梁に押し上げ、武家政治の再興を圖らしめた時勢の強い潮流は、抑ふべくも無かつた。而して彼が此潮流に乗り出す機會は、早くも建武二年（一九九五）七月に到來したのである。

第三章 足利尊氏の叛

北條復興の陰謀 執權高時を初め北條氏の首腦部は、元弘三年の五月を以て鎌倉で滅亡したのであつたが、當時數百家に別れて全國に蟠據した北條一族が全滅した譯では無かつたので、其殘黨は其年の暮以來所々に蜂起し、北は津輕から南は薩摩に至る迄、全國に亘つて新政反對、北條復興の烽火を揚げた。それ等は素より烏合の衆で、大事には至らなかつたが、京都に於ける武士の不平が熾になるにつれ、公家や大名中之に策應する者も出て、悔り難い勢を示して來た。高時の弟泰家は鎌倉没落の際辛うして虎口を脱出し、暫く陸奥に放浪の後、大膽にも京都に潜入して西園寺公宗に仕へ、名を時興と改め、公宗の計ひで持明院殿の院宣を請ひ受け、陰かに諸大名を手懐けて、一舉

に事を決行しようとして企てたが、建武二年六月陰謀露顯し、公宗等は囚はれ、時興は逃亡して纔に事無きを得たのであつた。

北條時行鎌倉を陥る 然るに之と氣脈を通じた信濃の諏訪、滋野諸族の一派は、翌七月高時の遺子時行を擁し、先づ信濃の守護小笠原貞宗を破り、三浦、芦名、那和、鹽谷、工藤以下宗徒の大名五十餘名與力し、信濃から武藏に出で鎌倉に迫つた。此時常陸の大椽高幹入道淨永も、舊好を思ひ、門族を率ゐて之に應じた。北條勢は上野では新田四郎の軍を打破り、武藏安顯原に澁川義季、岩松恒家等を破つて兩人を斃し、府中に小山秀朝、鶴見に佐竹五郎義直等の鎌倉勢を粉碎し、破竹の勢を以て三方から鎌倉に迫つた。鎌倉では足利直義が防備の手薄を名とし、七月廿六日護良親王を害し、成良親王を奉じ、義詮を伴うて鎌倉を退散したので、北條勢難なく之を乗取り、時行は廿八日鎌倉に入つた。此飛報が京都の上下を震駭せしめた事は言ふ迄も無い。

尊氏の東征 足利尊氏は京にあつて鎌倉没落の報を得、早速暇を賜つて直義に合力したき旨奏聞に及んだ。而して此時彼は將軍として出征し、且東八ヶ國管領の事を希望したが、八國管領の事は勅許なく、單に征東將軍に任せられ、八月二日京を進發した。時に公家の政治を不快とした武士の輩は、或種の希望を懷いて多く之に隨行した。かくて尊氏は三河國矢矧驛で直義に會して其軍を併せ、兩人馬を駢べて進撃したのであつた。

時行の没落 北條方では名越時基を大將とし、諏訪、三浦、大椽等の兵三萬を率ゐて之を

道に邀撃させた。兩軍は遠江の橋本に會戦し、血戦三十餘合の後、北條勢敗退して佐夜中山を保ち防戦に努めた。時に大椽の部下小栗重貞變心し、大將名越を斬つて尊氏に降つた爲、東軍志氣沮喪し、箱根の險も防ぎ切れず、相摸川を夾んで最後の抵抗を試みた。大椽高幹は手負を助け馬足を休め、且散卒を集めん爲、川面に楯を並べて堅固に防禦陣地を施した。時に西軍の先隊佐々木道譽馬を降り、流を截つて押渡らうとし、從兵新屋三郎を先登とし、部隊之に續いた。高幹は軍を中流に進め、矢石を雨の如く飛ばして之を防ぎ、三郎を斃したけれども道譽屈せず、劍を振つて兵二人を水中に斬り、遂に川を越え、後軍續いて悉く押渡り、潮の如く鎌倉に殺到した。一たび北條に黨した者も勢既に不可なるを見て續々足利に降り、最初から時行を擁立した者は、或は自殺し或は遁れ、八月十九日尊氏が鎌倉に入つた時には、殆んど空虚になつて居たのである。而して大椽高幹も力盡きて終に尊氏に降伏したのであつた。

尊氏鎌倉に據て叛す 尊氏今度の戦功顯著なりとあつて、天皇は從二位を授けて其功を賞し給ひ、且幕下將士の賞については、改めて京に於て綸旨を以て宛行ふべきにより、急ぎ歸洛すべきを命ぜられた。然るに尊氏は直義等の献策によつて歸洛の勅命を奉ぜず、其まゝ鎌倉に駐まり、新第を營んで自ら將軍に擬し、且獨斷を以て信濃、常陸等北條與黨の關所を從軍の將士に頒與した。此恩賞政略は當時の低級な武士を驅つて大に尊氏を謳歌せしめたものであつて、彼が京を離れての此處置は、其志の小ならざるを示すと共に、反謀既に著しいものがあつたので、其野心を察知した結

城親光の如きは、其下に屬するを屑しとせず、急き兵を抜いて上洛した。然るに在京の武士中、陰かに武家政治の再興を希望せる輩は、尊氏の此舉を傳聞して、急ぎ東國に下るといふ有様で、京鎌倉間の形勢次第に急迫に趨いたが、京に於ては成るべく事を穩便に取計はうとして荏苒時日を過す間に、尊氏は教書を諸國に傳へ、新田義貞追討の加勢を催促して兵を集め、十月中旬、終に義貞彈劾の奏狀を陛下に奉呈し、公然叛旗を掲げたのであつた。

佐竹貞義足利に黨す十一月二日鎌倉の足利直義は、尊氏の意を承けて、書を佐竹貞義に遣り國內の足利黨を統督して、各其疆城を固守せしめ、且常陸守護職は鎌倉時代、舊例により、貞義の任たるべきを傳達した。此職は建武元年尊氏が功に依つて新に武藏、下總と併せて三國の任を朝廷から授けられたのじつだが、今や之を貞義に還して其心を維いものである。時に貞義の子義篤、義春、師義等尊氏の幕下として鎌倉に在つたので、爾來佐竹一族は足利無二の股肱となつた。

結城朝祐足利に従ふ當時常總諸豪中足利に與した者は、佐竹の外に結城朝祐があつた。之は京から尊氏に従つて鎌倉に下り引續き其下に屬して部署について居たのである。朝祐が乃祖朝光以來の名族であり乍ら、何故かくも容易に足利の旗下に走り、其指揮に甘んずるに至つたかの内部の消息は察知するに難く無い。當時彼の同族たる白河の結城宗廣父子は、領國廣く士馬精強で、勢造かに本宗を凌ぎ、且父子相並んで奥羽幕下の評定衆に列し、殊に宗廣は高時討滅の勳功によつて、建武元年正月勅詔を蒙つて結城一族の總領に擧げられ、家格は既に本宗を追ひ越したので、自然兩家の間

既に多少の疎隔を生じ、朝祐の胸中に強い反感が醸されて居たと推察すべき理由がある。而して宗廣親光父子が純乎たる勤王黨として、反足利黨の有力な支持者であつたので、是等の形勢が朝祐を驅つて足利方に走らしめ、其勢を借りて家を興さうとの念を懷かしめたと推察せられるのである。尙此時小田氏では貞宗病氣危篤に陥つて居たので、兼て楠木新田と氣脈を通じて居た子治久は、之を理由に尊氏の催促に應じなかつた。かくて十二月貞宗五十二歳を以て歿し、治久後を繼いだが、續いて小田城に據つて敢て動かかなかつたのである。

義貞尊氏を討て敗る尊氏の謀叛に對し、京都に於ては評定の結果、十一月十九日新田義貞に節刀を授け、尊良親王を奉じ、脇屋義助、宇都宮公綱、千葉貞胤、菊地武重、大友貞載、鹽冶高貞以下六萬七千の兵を率ゐて、東海道を進んで鎌倉を討たしめ、別に十一月十二日鎮守府將軍に任じた北畠顯家に命じ、奥羽の軍勢を催はして鎌倉を夾撃せしめた。義貞等の軍は二十五日矢矧に於て、十二月五日手越河原に於て足利勢と會戦して共に之を擊破し、十二日進んで義貞は直義と箱根に、義助は尊氏と竹下に會戦して、義貞は大勝し、義助の軍も尊氏の部將結城朝祐以下七百の軍勢を擊破したが、部將大友、鹽冶等急に變心して尊氏に降つた爲、全軍圖志を失つて大潰亂に陥り、十三日殘兵を引繼めて尾張に退却するの止なき窮況に陥つた。時に尊氏の催促に應じて起つた諸國の足利黨が、在々所々に旗を揚げたとの急報が、續々京都に入つて上下の耳目を鼓動し、中にも赤松則村、細川定禪等が兵を擧げて中國、四國筋から京都に迫るといふので、朝廷では色を失ひ、急使

を發して義貞を召還した。かくして義貞は急ぎ京に引揚げたが、尊氏は子義詮に細川和氏以下少數の兵を附けて鎌倉を留守させ、東國勢の大部を率ゐ、十五日鎌倉を發し、義貞の後を追うて攻め上るのであつた。

尊氏京都に入る 明くれば延元元年(一九九六)正月、新田義貞、藤原公泰、脇屋義助、楠木正成、源忠顯、名和長年、結城親光等京の周圍を守つて賊軍の侵入に備へたが、足利勢は日に／＼其數を増加し、八十萬と號し、西方の赤松、佐々木等と相呼應し、正月九日以來官軍の陣地に殺到し、十日之を突破して京都に亂入した。義貞以下官軍諸將は京に退き、天皇は神器を奉じて比叡山に遷幸し給ひ、諸將は敗兵を集結して之を護衛し奉つた。かくて尊氏は十一日を以て、京に入つたのである。

結城親光の忠死 此時結城親光は、尊氏を斬つて難局を打開せんと決心し、獨り京に留まり、僅かに十七騎を従へ、詐つて尊氏の軍門に降伏を申出た、尊氏は其眞意を疑ひ、大友貞載を遣はして應對せしめた。貞載が降人の法先づ兩刀を脱して渡すべきを求めたので、親光は悟られたと感つたが、貞載の竹下に於ける裏切が、官軍今日の非運を啓いたものとして、極度に彼を惡んで居たので、親光は、よし兩刀を渡すと答へ乍ら、抜打ちに貞載を斬棄てた。大友の從兵八方から親光に斬つてかゝり、彼は終に壯烈な討死を遂げたが、從兵十七騎其場を去らず節に殉じた。常陸國志筑の住人益戸三郎顯助も其一人であつた。

奥州勢の西上及入京 鎮守府將軍北畠顯家は義良親王を奉じ、伊達行朝、結城宗廣親朝以下奥羽の大軍を率ゐて多賀國府を發し、途中越後、兩毛、常總の新田、宇都宮、千葉諸族勤王の兵を併せ、其衆五萬長驅鎌倉を襲うたが、尊氏西上の後で、鎌倉の守兵は遁け去つた爲、更に東海道を京へと急いだ。此時常陸那珂西の城主那珂通辰一族を率ゐて軍に投じた。佐竹貞義は尊氏の爲に奥州勢を尾撃しようとしたが、小田、大掾等の官軍に阻まれて手が出せなかつた。かくて奥州勢は正月十三日琵琶湖を渡つて坂本に着陣し、叡山に據つて苦戦中の官軍に駆け參じたので、義貞以下諸將の勇氣百倍し、二十七日尊氏の軍を撃破し、越えて三十日更に再度の痛撃を賊軍に與へ、西國へ追ひ落した。通辰は此時の戦功を録せられ、勅して桐葉菊花の紋章を賜はつたのであつた。

第四章 常陸勤王軍の奮闘

楠木正家常陸を徇ふ 足利黨の蜂起は殆んど全國的であり、特に關東地方は、上野の一角新田の本據地を除いては、動もすれば賊黨の巢窟たらんとする處があるので、楠木正成は延元元年(一九九六)正月族左近藏人正家を常陸に遣はし、此國の勤王黨を糾合して、佐竹の本據を經略せしめた。正家はやがて常陸に乗込み、那珂、小田、大掾諸氏の兵を催ほし、那珂川を越えて佐竹領に侵

入した。貞義は西金砂城に據つて之を防ぎ、城堅くして容易に抜けないので、正家は久慈西郡の瓜連(那珂郡瓜連村)に城を構へ、味方の軍勢を集めた。二月六日貞義は同族の軍勢を催はして瓜連を襲はうとしたのを、正家迎へ撃つて佐竹勢を破り、貞義の六子義冬を斬つて賊軍を追ひ散らし、二十五日再び賊の攻撃を邀へ、賊將後藤基明を斬つて再び之を撃退した。此兩度の戦に依つて佐竹一族間に多少の動搖を來し、佐竹幸乙丸族を離れて正家に應じ、其部將入野助房を瓜連城中に遣はして之に加勢させたのであつた。やがて那珂通辰京から歸國し、勤王軍の氣勢大に揚つた。

尊氏の佐竹懷柔 貞義の子義篤、義春、師義等は、嚮に尊氏の幕下に屬して京都に轉戦したのであつたが、尊氏が京都に敗れて九州に退去した際、深く關東の形勢を懸念し、義篤、義春の兩人を歸し、父を助けて關東方面の經略に當らしめ師義一人を伴うて九州に落ちた。而して彼は後に至つて義冬の陣歿を聞き、遙かに書を寄せて義直、義冬兩人が足利氏に殉じた事を恤み、貞義に常陸田中庄、陸奥雅樂庄を給して其悲を和らけた。この種の懷柔策は、昔頼朝の好んで行ひ、武士の聲望を博した所であつたが、尊氏亦それに倣うて、大に彼等の歡心を迎へたのである。

奥州勢の東下 二月京都では義良親王を陸奥大守に、顯家を權中熱言兼鎮守府大將軍に陞任し、結城宗廣父子等と再び鎮所に歸任せしめた。且此時から鎮守府には奥羽二州の外常陸下野の二國を管領せしめ、三月親朝を下野守護職に補した。顯家等の一行は四月歸任の途中暫く下野の宇都宮に駐つて附近の賊黨を討平けた。時に鎮守府の將陸奥留守職唐橋經泰が、奥州相馬の族胤平等の兵を率ゐて常陸に徇へ、九日以來新治筑波附近に轉戦し、中郡、北條、村田、小栗等の賊城、並に小田一族中賊と通ずる小田左衛門佐、同越中入道等の堡を攻めて賊黨を風靡し、廿四日宇都宮に顯家等の本軍に合した。奥州勢はやがて宇都宮を發し、五月常陸に入り、入野助房之を途中に出迎へ、兵を分けて那須の賊黨を伐ち、かくて白河から仙道を國府に還つた。

奥常兩州官軍振ふ 常野二州が鎮守府の管下に歸して以來、奥州官軍の南下は頗る活潑となつた。顯家は歸府後間も無く、五月廿四日奥州相馬の小高城を攻めて賊將相馬胤胤、族長胤胤、胤治等五人を斬り、廣橋等諸將を派して海道を常陸に進撃せしめ、六月那珂通辰之と策應して、佐竹貞義の大軍を久慈郡斐原(多賀郡坂上村大薗)に夾撃して大に之を打破つた。時に佐竹義篤は武弓城(久慈郡高倉村武弓)に據り、父貞義の金砂城と呼應して官軍に備へ、七月に入つて岩城の賊黨を促がして瓜連を攻めようと圖つたが果さなかつた。八月廣橋經泰相馬胤胤等の諸將、石川庄秋山城を攻めて之を降し、長驅南下して常陸に入つた。時に岩城の族鯨岡乘隆官軍に應じ、十九日子行隆を遣して南侵せしめた。行隆等は進んで中郡の橋本(西茨城郡東那珂村上城)に陣し、二十日に村田城を二十一二兩日に小栗城を攻めて之を破り、二十三日轉じて宇都宮城を攻めた。當時宇都宮公綱官軍に屬して京都にあり、留守の城將賊に内通した爲、顯家が乘隆に命じて之を討たせたのであつた。此時佐竹義篤は陸奥への侵入を企て、石川の賊を嚮導とし、二十二日佐都東郡小里(久慈郡小里村)に赴き、一方叔父義高をして瓜連を攻めさせて官軍を牽制し、竊かに陸奥の賊黨と策應して、鎮守府

の管下を攪亂しようと試みたのであるが、官軍報を得て相馬胤平の一軍急馳之に赴いて小里を攻め佐竹の部將橋内光胤、二階堂五郎を斬つて之を破り、瓜連の方では廣橋經泰、小田治久等之を花房山(郡戸村花房)大方河原(金郷村大方)に邀へ、難なく賊軍を撃退した。此の如く佐竹父子は、奮闘雖も努力たけれども、勤王軍の勢大に振ひ、爲に漸く其領内を衛り得たに留まり、領外に進出することは出来なかつた。

楠木正成の陣歿 正月三十日京都に大敗した足利尊氏、直義兄弟は、一旦丹波篠山に退き、更に引續き楠木正成、新田義貞等の追撃を防ぎつゝ攝津方面に退却し、二月十三日兵庫津から乗船し九州目指して西下し、二十日赤間關に着、二十九日筑前芦屋に至り、少貳、大友等の軍勢を併せて三月二日菊地武敏等の官軍と多々良濱に會戦して大に之を破り、それ以來九州の軍勢尊氏に歸屬するもの多く、從て彼等は暫く九州に留つて兵力を養つた。而して此間京都官軍の追撃が涉々しく進展しなかつたのは、顯家以下の奥州勢を東に歸し、兵力が手薄になつた爲と推量せられる。かくて三月末になつて義貞は播磨に、四月に入つて義助は備前に出陣して賊軍の掃蕩を計つた。尊氏等此報を得て四月下旬九州を發し、海陸並び進み、五月廿五日攝津の湊河に楠木正成を破り、正成は此戦に陣歿を遂げた。此日新田義貞は播磨白旗城の圍を解いて歸京し、而して天皇は神器を奉じて再び叡山に遷幸し給ひ、尊氏は三十日入洛して東寺に據り、又もや山上山下の對陣となつた。

南北兩朝の對立 山門に扈從した武士は新田義貞、脇屋義助、宇都宮公綱、千葉貞胤、菊地武

重、土居通増、得能通綱、名和長年等で、六月五日坂本の戦を手始めに所々に戦が開かれたが、官軍決死の勇を振つて屢賊軍を撃破し、十三日一舉に雌雄を決せんとして大舉山を下り、東寺の賊本營を襲つて敗退し、長年の陣歿を見た後は、山上は漸く糧食の欠乏を告げ、勢次第に衰へたけれども、尙不屈不撓の勇を振つて、賊の侵入を撃退するのであつた。下總の住人相馬四郎左衛門忠重が相摸の住人本間孫四郎重氏と唯二人、手練の強弓を射て足利勢二十萬騎を撃退した武勇譚は、太平記卷十七に見えて居る。かくて尊氏は何時迄も朝敵の名を負ふことを厭ひ、八月十五日持明院統の豊仁親王を擁して帝位に即かせ奉り、表面兩天皇の御争の如く粧ひ、賊名を蔽うたのである。かゝる間に官軍は後援續かず、勢日々に蹙まる狀況に陥つた。それと見た尊氏は、十月降伏和談の議を申出たので、天皇は己むを得ず之を許し給ひ、十日京都に還幸あり、同時に義貞は皇太子恒良及尊良の兩親王を奉じて北國に落ち、北畠親房は伊勢に走り、其他宗良親王は遠江に、懷良親王は吉野にと諸方に別れて共々に興復を圖つたのである。而して尊氏は十一月二日神器を新帝に傳へ給はんことを請うたのに對し、天皇は豫て御用意の偽器を授け、十二月二十一日夜窈かに神器を奉じて吉野に遷幸あり、楠木正行以下伺候、愈南北兩朝の對立を見るに至つた。

常陸官軍の衰勢 京都方面の此情勢は自然地方に反映し、賊黨の勢漸く強く、從て陸奥國府の軍勢も次第に苦戦に陥るを免れなかつた。常陸の形勢も略ほ同様で、佐竹勢大に勇氣を恢復し、義篤は十二月二日叔父馬淵景義と二手に別れ、大軍を率ゐて瓜連城に進撃した。經泰治久等復之を久

慈東郡に逸へ、岩手河原に戦つて敗退し、義篤等の兵潮の如く瓜連城に肉薄して之を包圍した。城兵よく防ぎ悪戦苦闘屢敵を退けたけれども外援來らず、十一日終に陥落し、正家並陸奥の軍勢は圍を突破して鎮守府に投じ、小田大椽等の兵は各其本據に遁れ、而して此城の中堅を成して居た那珂通辰以下一族四十餘人は、或は戦死し或は捕はれ、通辰以下の捕虜は太田の北なる増井勝樂寺の本松の傍で悉く斬殺せられ、那珂氏は一族を擧げて難に殉じたのであつた。唯此時幼兒一人難を免れたのが、後足利氏に仕へて一家を再興した、それが江戸通泰である。

宇都宮公綱 嚮に京都に官軍に従ひ、後山門に據つて最後迄賊軍と苦戦を續けた千葉宇都宮兩將の中、貞胤は終に其最後に於て尊氏に服屬して節を屈して了つたが、公綱は天皇に扈從して京に入り、天皇が花山院に幽せられ給ふに及び、賊軍に囚はれて尙節を守り、髪を削り服を易へて宇都宮に逃げ還り、城内の賊黨を誅除し、陸奥の顯家と連合して賊軍の討伐に當つた。

陸奥官軍の苦戦 延元二年(一九九七)正月に入つて、陸奥鎮所は賊徒の蜂起に忙殺さるゝのみならず八日には國府を侵さるゝの難局に立つた。此地は要害も至つて手薄であつたから、鎮守府大將軍顯家は國府を放棄し、義良親王を奉じて伊達郡靈山城の天險に鎮所を移した。時に吉野の朝廷は、吉野山間の天險を頼りに、賊軍に對して僅に消極的に防禦に努むるに留り、到底積極的に京都に進撃するに要する兵力を缺いて居た。仍て天皇は江戸忠重を使とし、手詔を顯家に賜ひ、速に奥羽の大軍を催はして近畿に攻め上るやう、切なる數旨を御示しになつた。忠重が此數旨を齎して靈山に着い

たのは正月の廿五日であつた。而して之と相前後して越前の新田義貞からも書を顯家に寄せて、一日も早く京に攻め上ることを勸めて來たのである。

陸奥賊黨の南侵 陸奥の鎮所が國府を棄て、靈山城に移された事は、東北並に關東地方の賊黨に氣勢を添へ、從て佐竹父子がそれ等を連繫して所々に侵略を試みる形勢を馴致した。されば顯家が西上を決行するに就ては、是等の賊黨を撃破し屏息せしめて、後顧の慮を絶つことが先決の急務であつた。仍て顯家は一月靈山を發し、宇都宮に兵力を集めて四隣の征伐を開始した。然るに二十一日陸奥の賊石川持光其族を率ゐて宇都宮に迫り、これは官軍に撃退せられたが、此日陸奥の賊石堂秀慶が相馬親胤梶原三郎左衛門尉等を率ゐて常陸に現はれ、長驅して關宗祐を關城に襲うた。宗祐は兵を中沼渡に出し、拒ぎ戦つて敗れ關城に拒守したが、此時親胤の一軍は鬼怒川の上流を渡つて城に逼り、火を近村に縱つて數百家を焼いて引揚けた。而して佐竹義篤亦之と策應し、常陸陸奥の賊黨を糾合して、小田城に迫つたから、小田治久は大椽高幹と兵を連ね、二十四日賊軍を富岡山に逆へ戦ひ、廿六日賊營を逆襲し、廿九日三たび戦つて城に退いた。かくて石堂藏人は下野を経て陸奥に歸り、顯家は亦三月十日宇都宮から靈山に歸つた。

佐竹勢の活躍 此後佐竹勢の侵出は尙止まず、三月十日義篤は叔父長倉義綱並小栗高重等と兵を併せ、國府に迫つたので、小田治久等高幹を援け、國府原に戦つて之を却けた。此後義綱は伊賀盛光等の兵を率ゐて鹿島郡に入り、徳宿畑田等の賊黨を招き、汲上(上島村汲上)から軍を北に旋

し、海道を陸奥に侵入した。顯家は之に對し五月十一日兵を標葉郡に出して賊を掃蕩し、七月十四日更に楠木正家、東彌九郎を遣はし、兵を率ゐて常陸を徇へしめた。兩將は佐竹義篤、吉原源藏人等と會戦し、數日に亘つて勝敗決せず、互に死傷多く、兵を引いて陸奥に歸つた。此月常陸南方の官軍が東條城(稻敷郡太田村下太田)に旗を揚げたが、之を聞いた佐竹義春は鹿島畑田等の賊を促がして之を攻め、龜谷城(君賀村羽賀)を占領して根城とし、屢々兵を出して附近を侵略した。

宇都宮公綱の西上 公綱は下野地方の鎮靜を待ち、此年の夏兵五百騎を率ゐて西上し、吉野の行宮に朝して天機を奉伺した、天皇之を嘉賞し、左近衛少將に任じ給ひ、公綱は暫く吉野に留つて御警護の重任に當つた。此頃の近畿の狀勢は、三月初に越前金ヶ崎城陥り、皇太子恒良並尊良兩親王害せられ給ふなどの事があつて、官軍の勢頗る振はなかつたが、賊も亦敢て積極的に吉野を侵す等のことを爲なかつた。尙一つ重要な事は、北條時行を首領とし、全國諸所に潜伏する北條の殘黨が足利一族に對する反感から、舉つて官軍に投じ、使を吉野に遣はして歸順を申出で、尊氏を討つて祖先以來の大罪を贖はんことを奏請し、勅許を得た事實である。公綱は冬に入つて歸國の途についた。

奥州勢の再西上 鎮守府大將軍北畠顯家は愈再西上の策を決し、結城親朝小田時知等を留後として奥羽の賊に備へ、八月十九日義良親王を奉じ、結城宗廣、伊達行朝以下六千の兵を率ゐて靈山城を發した。奥羽兩州の兵續々來會し白河に出た時には其數既に十萬に上り、宇都宮に駐まつて後

軍を集結した。時に下野の小山氏は秀朝の子朝郷が城主であり、下總の結城氏は、朝祐將に筑前多々良瀆の戦に尊氏に従て陣歿し、城主直朝尙幼少であつたが、此兩城は賊軍に與して居たので、顯家から使を遣はして小山の開城を促したけれども朝郷は應じなかつた。仍て兵を發して之を圍み、攻戦十三晝夜にして之を抜き、朝郷を虜にした。時に結城宗廣同族の好を以て、請て己が陣中に囚へ、後國に還した。宗廣は此二城主に對し、追て之を官軍に招がうとの底意があつたものゝ様である。

奥州別軍の活躍 此頃常陸の笠間泰朝が其城に據つて勤王の旗を掲げたので、東條附近を經略中の小瀬義春は、兵を移して之を攻めた。時に奥州別軍の將春日顯國楠木正家等、海道筋を迂回して常陸に入り、小田治久大椽高幹等の兵を會し、南郡大枝(玉川村下玉里)に屯して官軍を集結した。大枝の地頭は嚮に結城親光に従て戰死した益戸顯助の子國行であつた。義春之を聞き、笠間の圍を撤して攻めて來たのを、小河郷大塚原(東茨城郡桶村大塚)に邀へ戰つて大に之を破り、かくて顯國、正家治久等は宇都宮に往つて顯家に會し、後治久以下常陸諸將は、佐竹の進出を牽制する爲、本軍の抑として其本領に歸り、賊軍に備へたのであつた。

利根の渡河戰 顯家の率ゐる本軍は、十二月十六日宇都宮を發して武藏に向ひ、之に對して鎌倉の足利義詮は細川和氏上杉憲顯を遣はして、利根の渡に防がしめた。會ま大雨の後で、河には濁流滔々として漲り、兩軍は流を挾んで暫く睨み合ふ中、官軍の陣から齋藤實永、同豊後次郎兄弟

馬を進め、颯と水に乗入れて對岸目がけて泳ぎ出した。十萬の官軍勇躍して之に續き、馬首を描へて乗入れ乗入れ押渡つたので、流水爲めに堰き止められて、賊軍の陣地に溢れ出し、敵を中流に防がうとして馬を乗入れた鎌倉兵は、度を失つて溺死するもの多く、遂に潰亂に陥つた。官軍時を移さず之を伐ち、逃ぐる敵を追うて南進し、武藏の府中に駐つて兵馬を休めた。

宇都宮の内紛 此時宇都宮公綱は吉野から歸國し、直ちに一千の兵を率ゐて、軍の後を追ひ府中駐兵中へ合體した、然るに此際宇都宮の重臣芳賀禪可は、官軍が遠く宇都宮を離れた隙に乗じ公綱の子氏綱を擁して賊軍に應じ、宇都宮に據つて叛旗を翻した。元來宇都宮の重臣芳賀、益子の二氏は祖宗圓興以來その股肱として仕へ、芳賀は清原氏の族で芳賀郡の眞岡に、益子は紀氏の族で同郡の益子に城き、宇都宮の兩翼となつて戰陣に勇名を馳せ、所謂紀清兩黨として幕下に雄視して居たものである。而して當時芳賀禪可は守護代として主人に代つて國內に臨み、勢力を負うて居り、之に對して益子が權力を競ふ様な關係から、鎌倉の謀士等利を以て禪可を誘ひ、終に此變を招くに立到つたものである。依つて顯家は直に行朝の部下伊達信夫兩部の兵を返し、宇都宮を包圍して急に攻めさせたため、叛徒は防戦三日の後力盡きて開城降伏した。かくて伊達等の兵は本軍の後を追うたが、宇都宮領は此後引續き動搖を免れなかつたのは己むを得ない。

奥州勢鎌倉を略す 此時新田義貞の次子義興、鎌倉を討たうとして兵を上野に擧げ、三萬騎を率ゐて武藏に入り、府中に来て顯家の軍に合した。官軍愈振ひ、二十三日府中を發し行く、賊軍

を掃蕩して鎌倉に迫つた。而して嚮に吉野に歸順した北條時行は、伊豆の兵五千騎を率ゐて亦之に合し、三軍呼應して義詮を鎌倉に攻めた。かくて二十八日賊將斯波家長以下敗死し、義詮三浦に逃走して、難なく落城したので、軍は思ひ出多き此地に屯して、延元三年（一九九八）の正月を迎へたのであつた。

奥州勢東海道を攻上る 正月八日顯家以下の奥州勢は鎌倉を發し、潮の如く東海道を攻上り遠江では宗良親王、尾張では熱田大宮司昌能、美濃では堀口貞満等の官軍を合せ、同國青野原に於て、土岐頼遠、桃井直常等の賊軍、並に鎌倉から追躡して來た細川和氏、上杉憲顯等の軍と激戦を交へ、大に之を撃破した後、路を伊勢に轉じ、二月十四日高師泰の軍と雲津川に戦つて之を破り、進んで奈良に入つた。

北畠顯家の陣歿 かくして漸く畿内に迫り着いた奥州勢も、長途の疲労に頗る振はず、賊將桃井直常の軍と奈良及四天王寺に戦つて敗れ、義良親王と宗良親王とは吉野に入らせ給ひ、顯家は河内に遁れた。而も尙屈せず、三月顯家は和泉に弟顯信は男山に出陣して京の奪取を企てたが、男山は高師直等の軍に圍まれて官軍再び利あらず、五月二十二日師直の軍が和泉に進出し、顯家は之と戦つて敗れ、堺浦の石津に陣歿した。時に齡僅か二十一歳であつた。宇都宮公綱は關東形勢の變を慮り急遽兵を引いて歸國し、芳賀以下の賊黨を討つて之を降し、領内を平けた。

大塚高幹賊に降る 奥州勢西上した後の常總は、當初は格別の動搖を示しなかつたが、近畿

に於ける官軍不振の情報が傳はるにつれ、其影響を被むるに至つたのは已むを得ない。常總の四大族中、佐竹氏は最初から思實なる足利黨であり、結城氏は城主直朝幼弱であつた事と、同族白河結城の牽制があつて、足利黨ながら未だ積極的行動に出て居なかつた。之に對し小田氏は、其家柄から見て、足利氏の下に屈するを屑しとせざる立場にあり、其旗幟は勤王黨として最も鮮明なものであつた。然るに大椽高幹は、小田治久に促がされて其黨になつては居たが、其同族中、眞壁東條等は官軍に與して小田の幕下たる地位に置かれ、鹿島、行方小栗等は賊に應じ、佐竹の幕下として義篤義春の驅使を受くる有様となり、一家分裂の苦境に立ち、大に煩悶の模様であつたが、周圍の情況は賊軍の勢力日を追うて隆盛となるに動かされ、七月使を鎌倉に遣して款を通じた。治久之を察して大に怒り、志筑の益戸國行等と兵を連ね、廿六日府中の石岡城を攻め、高幹は族人税所虎鬼丸等に兵を授けて之を途に防がしめ、兩軍市河(新治村市川)舟樹(?)、大橋(高濱町大橋)の邊 戦ひ、勝敗決せず、治久は兵を引揚げた、かくして小田大椽は仇敵の間柄となつたのである。

第五章 北畠親房卿と小田城

結城宗廣の官軍再興策 此年閏七月二日、勤王軍の大立物として、北越地方に轉戦し、賊軍を脅威して居た新田義貞が、藤島の戦に果敢なき最期を遂げ、此報を得た吉野行宮の上下は、愕然

として色を失うた。時に結城上野入道宗廣慨然として策を献じ、嚮に鎮守府大將軍顯家卿が、僅々三歳の間を以て、再度の大軍を發して西上することを得たのは、奥羽兩州皆卿の軍令に従ひ、賊が其隙を覗ふことの出来なかつた爲である。兩州の人心の偷らぬ中、臣重ねて親王を奉じて遙かに陸奥に歸り、忠を賞し奸を罰して兩國を平け、後復た大兵を率ゐて西征したならば、歲月を費さずして功業の成るは疑無い。陸奥五十四郡、其廣大なる殆んど日本六十餘州の半にも匹敵する、全州歸順せば兵四五十萬騎を下るまい。臣冑を白髮首に戴き、親王を扶持して誅伐せば、其功の易きこと掌を反す様なものであらうと説いた。天皇其議を嘉納し給ひ、其月廿五日新に顯信を鎮守府大將軍に補し給ひ、顯信は父親房と共に大守義良親王を奉じ、宗廣行朝等の武將を伴うて東下することになつた。

全國的計畫 吉野朝廷の此計畫は、全國的に官方武士の結束を強固にし、相聯絡して朝威の復興を圖らうとする大計畫の一部をなすもので、單に奥羽の大軍だけを目的としたものでは無かつた。即ち其所謂大計畫といふのは、義良親王を中心として奥羽並關東の官方を統一すると同様に、宗良親王及故尊良親王の子守永親王を遠江に、懷良親王を九州に、滿良親王を四國に派して、各地方の士心を統合し、而して其聯絡には瀬戸内、紀伊、志摩、伊勢等の海賊方を以て、海路に依つて之に當らしめる手筈であつた。かくて兵船五百餘艘を伊勢國大湊に艤裝し、準備成ると共に出發を開始し、各軍はそれ／＼目指す方面に針路を取つたのであつた。

颶風大計を破る 八月十七日義良親王の御乗船が大湊を船出したのを先頭として、五百餘艘次々に帆を揚げて東を指した。然るに九月九日一行が遠州灘に差かゝつた時、颶風俄かに起つて船は洋中に翻蕩せられ、翌十日洋中を漂流したが、十一日又々烈風吹き起つて暴威を振り、多数の船は顛覆して、可惜勇士の溺歿するもの無数、慘澹たる光景を現出した。此間に宗良守永兩親王の船と、北條時行等の船は遠江の白羽湊に漂着して、一行の目指す井伊城に入つたが、義良親王、親房、顯信、宗廣等の船々は、一旦伊豆沖を漂うて居るうち、風向一轉して親王及顯信等の船は伊勢に吹付けられて飯島に着き、宗廣の船は吹上村に漂着した。宗廣は此地にあつて風の便を俟つて再び出發しようとする中病にかゝり、生前朝敵を滅し得ざる怨を懐いて、空しく異郷の露と消えたのであつた。其の他の船で新田義興の船は武蔵國石濱に着いて此地に上陸し、親房行朝春日顯時等の船は、房總沖を通過し、常總間の内灣に入つて、信太の東條浦に漂着した。其他一艘二艘と別れくになつて東海、關東の海岸に漂着したものも少く無かつたらしいが、いづれも敵に捕へられ、非業の最期を遂げた模様である。此の如くして折角の大計畫も、不幸天災の爲に大頓挫を來し、唯三親王及主要なる公家大名等の溺歿を免れた事だけが不幸中の幸ともいふべきであつた。

常陸東條の旗揚げ 親房卿等一行の漂着した東條浦といふのは阿波半島と浮島との間に抱かれた阿波灣附近一帯の稱呼で、當時此處には大椽の族東條氏が據つて居り、其隣地江戸崎城には、小田の被管土岐氏が居り、此兩氏は以前から勤王黨として小田の幕下に歸屬して居たので、一行の漂

着地が鹿島行方等の賊黨の地で無かつた事は天佑とも言へよう。小田治久は急報によつて同盟たる關、下妻、眞壁等の兵を催はして援軍を送り、卿は阿波の傍なる神宮寺城に勤王の旗揚げをした。之を聞いた佐竹義篤は、幕下多賀庄山尾(楯形村友部城主)小野崎通春を遣はし、大椽、鹿島、畑田、宮崎等の賊黨を驅り、多数の兵船に取り乗つて、東條浦に漕ぎつけ、十月五日まだ備の整はぬ神宮寺城を攻めて忽ち之を陥れた。親房卿は直に附近の阿波崎城に移り、且義兵所在に群起して城に駆け付け、氣勢を揚ぐる情況になつたので、通春は兵を分けて援兵の投入する道々を塞ぎ、短兵急に攻寄せた爲、此城も陥り、卿は顯時以下と共に此處を遁れ、漸く小田城に入ることが出来た。

親房卿小田城に據る かくて卿は暫く常陸に留つて關東方面を經略し、兵力の恢復を俟つて奥州に移り更に西上を策する方針を定め、十月一日、其部下遠江守秀仲(姓缺)に命じ、書を近地に移し、正税を徴して守城の兵糧に充て、且常總野の諸豪に書を遣り、勤王の旗揚げを勧誘した。此時關宗祐は關城を守り、下妻政泰は大寶城を守り、眞壁幹重は眞壁城を守り、伊達行朝は伊佐城を守り小田並に其幕下諸城と聯絡して卿の節度を奉じ、官軍の旗色やゝ振つたのであつた。

宍戸家時の離反 小田の族宍戸氏は始祖家政以來幕府から特殊の地位を與へられ、宗家に次ぐ聲望を有し、小田氏の有力なる羽翼をなして居たのであるが、騒亂の時代に入つて、佐竹一派の策動功を奏し、家時は終に宗家を裏切つて賊黨に投じ、親房卿が小田に入るに及び、順逆を説いて復歸を勧めたけれども應じなかつた。時に家時は吉田郡吉田郷の田十三町を兼領して居たので、親房

卿等は朝廷の名に於て之を籍没し、吉田社に寄附して國家の治平を禱つた。それは延元四年（一九九九）三月二十三日のことである。

卿の宇都宮援助 宇都宮の領内は城主公綱の不在中、既に形勢一變し、公綱の弟綱世、宿老芳賀禪可と謀を合せ、公綱の子氏綱を擁して賊軍に通じ、宇都宮の城中はこれ等賊黨を以て充されて居り、唯僅に益子の族が笠間泰朝と公綱を支持して官軍に應じ、一隅に割據して居たに過ぎず、領内大に亂れ、從て其歸國後は幽閉同様の身となり、之を奈何とも爲し得ざる窮境にあつた。蓋し彼は數回の西上の爲部下の精英を失ひ、且多大の出費を要し、自然國力の消耗を來した結果に外ならない。而して宇都宮勢力の崩潰は、小田と白河との聯絡を脅かすことになるので、其まゝに放置されぬものであつた。親房卿はこの狀勢を聞き、兵を下野に出し、亂徒を烏山、宇都宮等の諸城に攻め綱世及其子某を斬つて之を破つたけれども、公綱の勢力恢復は殆んど望み得べくも無かつたのである。此時春日顯時は、兵を率ゐて中郡木所（東那珂村木植）城を拔き、其地に據れる賊黨を掃蕩し、顯國を主將とし、手兵を置いて之を守らせた。

後醍醐天皇の崩御 此年八月十六日、後醍醐天皇吉野行宮に崩御あらせられ、義良親王御齡十二歳にして皇位を繼がせ給うた。後村上天皇と申す。此飛報が小田城に達した時の、親房卿以下の驚きと歡喜の様は追想するに餘りがある。卿は爾來城中にあつて、兵馬控働の間に筆を呵し、職原鈔、神皇正統記の二書を綴り、前者は之を新帝に奉つて朝廷に於ける公事の準則に備へ、後者は

之を童蒙に讀ませ、國體の大義を理解せしめようとしたもので、共に卿が盡忠報國の精神の結晶に外ならない。特に正統記の如きは、最略の皇代記以外には一卷の參考書も無く、殆んど全部卿の記憶中から、あの名著を編み出したのであつて、其絶倫なる精力、其卓拔せる見識、其熱烈なる忠誠は、後世國民をして、奮然驚起せしむるものがある。

親房卿の思想 卿は神道儒學佛敎の奥儀を究め、識見高邁當代稀に見る碩學であつた。而して實際政治を料理し、戰陣に馳驅するなどは、その本領とする所で無かつたにも拘らず、敢て身を挺して之に當り、一家一族を擧げて時局の收拾に盡瘁した所以のものは、盡忠報國の至誠己むに己まれぬが爲であつた。卿の最も憂へた所は、當代紛亂の根元たる國民思想の墮落であつて、上下を學べて眼前の利慾に狂奔し、國體の本義を没却し、臣子の本分を逸視して、恥ることを知らざる思潮の横溢にあつた。されば卿が小田城にあつて現前の敵と交戦しつゝ筆を呵して書き遺された神皇正統記一篇の主旨は、實に炳として日星の如き國史の成蹟を提示して、讀者をして金甌無缺なる我國體の大義に醒めしめ、翻然として臣子の本分に立還らしむるにあつた。その序説の劈頭

『大日本は神國なり。天祖はしめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり、異朝には其たぐひなし。此ゆへに神國といふなり。云々』

と喝破し、その深遠なる神道論國體論を進め、やがて

『唯我國のみ天地ひらけし初より、今の世の今日に至るまで、日嗣を受給ふ事よこしまならず、一

種姓の中にをきても、をのづから傍より傳へ給ひしすら、猶正にかへる道ありてぞ、たもちまし
くける。是しかしながら神明の御誓あらたにして、餘國にことなるべきいはれなり。抑神道の
事は、たやすく顯はさずと云事あれど、根元を知らざればみだりがはしきはしめともなりぬべ
し。其ついでを救はんために、聊か勅し侍り。神代より正理にて受傳へるいはれを宣ん事を志し
て、常にきこゆる事はのせず。然れば神皇正統記とや名つけ侍べき。』

と結び、更に筆を改めて神代から序を追うて治亂興廢の跡を述べ、隨所に評論を試みて居る。就中
後醍醐天皇の條に、武人等が恩賞を競望する様を述べた後に

『およそ王土にはらまれて、忠をいたし命をすつるは人臣の道なり、かならず是を身の高名とおも
ふべきにあらず。しかれども後の人をはけまし、其跡をあはれびて賞せらるゝは君の御政なり、
下としてきほひあらそひ申べきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望みをいたす
事、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有がたきならひなりけん
かし。』

と論じてあるのは注目に値する。卿の足利尊氏觀の要点は

『抑彼高氏公家にまいりし其功はまことにしかるべし。すゞろに寵幸ありて抽賞せられしかば、ひ
とへに頼朝卿天下をしづめしまゝの心ざしにのみ成にけるにや、いつしか越階して四位に叙し、
左兵衛督に任ず。拜賀のさきにやがて従三位して、程なく參議従二位までのほりぬ。(中略)關東

の高時天命すでに極りて、君の御運をひらきし事は、更に人力といひがたし。武士たる輩いへば
數代の朝敵なり。御方にまいりて其家を失はぬこそあまりある皇恩なれ。更に忠をいたし勞をつ
みてぞ理運の望みをくはだて侍るべき。しかるを天の功をぬすみて己が功をおもへり。介子推
がいましめも習ひ知るものなきにこそ。』

といふにあつて、勢を負うて天皇の尊嚴を冒瀆せる不臣の振舞に痛撃を加へて居る。併し卿は武家
政治其ものを全般的に否定するもので無かつた事は、後嵯峨院の條に頼朝泰時を併せ論じて、

『およそ保元平治よりこのかたのみだりがはしさに、頼朝といふ人もなく、泰時といふものなから
ましかば、日本國の人民いかゞなりなまし。此いはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威のおとろ
へ武備のたちにけると思へるは誤なり。』

といひ、よく其分を守つて誠意國土民人の安寧に努力した功績を稱揚した事によつてよく判る。思
ふに卿のこの悪思潮に對する啓蒙的獅子吼は、或は當代の俚耳に徹らなかつたかも知れぬ。併しそ
れは天下後世の志士仁人を興起せしめずには置かぬのであつて、三百年の後この國の一角から、義
公の大日本史の出現を見た事は、因縁の淺からざるを思はしめるのである。

高師冬の來侵 足利尊氏は、京都にあつて關東の形勢を聞き、部將高師冬を遣はして常總地
方の經略に當らしめた。師冬は四月六日京を發して鎌倉に下り、八月鎌倉を發し、沿道の兵を募り
九月武藏に入り、陣を村岡宿に張り、附近の與黨を召集して形勢を窺ひ、十月廿二日並木渡を越え

て下總に入り、結城山川の族等其旗下に駆け参じた。時に中御門實寛、關郡の駒城（眞壁郡上妻村黒駒）に據つて兵を擧げ、常總の官軍續々其城に入つて之を守り、小田城と呼應したので、師冬は先づ備の整はぬ新城を手始に經略の歩を進めようと決心し、二十三日折立渡（結城郡上山川村折立）を涉つて火を民屋に縦ち、駒城に取詰め、二十六日樓櫓を構へて城を圍み攻めたが、二十七日には城兵逆襲して賊營を破り、頑強に抵抗を試みた。かくて師冬は十一月初、鋒を轉じて目指す小田城を攻めたが、城兵能く防いで寄せ附けず、依つて師冬は城を遠巻にして其動靜を監視し、主として駒城の攻圍に勢力を傾注し、七日、八日競ひ進んで城壁を破壊したけれども、城兵奮闘して之を却け二十九日復た肉薄して撃退せられ、かくして小田、駒の兩城は包圍を受けたまゝ翌興國元年を迎へたのであつた。

官賊兩軍の對峙 小田城の親房卿は、興國元年（二〇〇〇）の正月以來、駒城の友軍と呼應して、屢兵を出して賊營を襲はせた。賊將師冬は、官軍の鋒の銳きに懼れをなし、交戦を避けて險に據り、糧を貯へて持久の策を立て、官軍も亦自然堅く衛つて敢て戦を挑まず、相對峙して數月を送つた。時に廣橋經泰は、陸奥海道の要地を扼して、相馬親胤等の賊衝に當つて居た。會ま三春の田村宗季の族が使を小田に通じ、相犄角して賊黨を伐たうと申入れて來たので、親房卿は四月三日白河の結城親朝と海道の廣橋經泰とに書を遣つて出陣を勸めた。其白河への書狀の趣旨は、『常陸の兇徒は目下不振の状況にある。此時を以て兵を那須に出し、應援の勢を示さば、常總の賊

は懼れて解散しよう。それが困難とあらば海道から直に瓜連附近に出兵して威嚇したゞけでも、我守城の聲援の効果が確實であらう。云々』といふにあつた。併し親朝は出兵をしなかつた。

駒城の爭奪 此年鎮守府大將軍北畠顯信、下野國司左中將道世以下を率ゐて吉野を發し、五月十九日白河に着陣した。小田の城兵は折あらば近國の官軍と呼應して突出せんと、緊張して其機會を窺つたのであるが、駒城の守兵は近來敵の攻撃の涉々しからぬに慣れ、やゝ防備を怠つた。賊は其油斷を捉へ、五月廿七日夜暗に乗じて駒城を襲ひ、城兵戦死三十餘人に上り、首將實寛奮闘の後賊の捕虜となり城陥つた。之を聞いた關下妻、眞壁等の官軍は、翌二十八日奮起して、八丁目（眞壁郡川西村八丁）關本（關本町）鷲宮、善光寺（共に不明）等常總國境線に連る賊營を襲うて一舉に是等を抜き、更に勢に乗じて下總に亂入し、翌二十九日飯沼砦（結城郡豊岡村飯沼或は猿島郡逆井山村逆井？）を抜いて賊の後衛を一掃したので、師冬大に懼れ、小田城の側營を焼き、圍を解いて兵を佐竹領内に引揚げ、かくして駒城は直に官軍の手に奪還したが、實寛は終に之を救ふことが出来なかつた。

親房卿頻に白河の出兵を促す 親房卿を總帥と仰ぎ、小田城を中心として、附近の諸城を連ぬる常陸の官軍は、高師冬を黨首とし、佐竹、大椽、結城の三大族と結ぶ賊黨に比し、其兵力極めて微弱で、僅に守勢をとつて、攻め來る敵を撃退するか、乃至不意に敵陣地を襲うて局部的の損害を

與ふる位に留まり、到底進んで敵の諸城を略し、錦の旗風に四境を靡かすなどの餘裕が無かつた。此局面を打開し、形勢を有利に導く爲には、國外から優勢なる援軍を得て、師冬並に佐竹勢に對し痛撃を與ふる外に道が無いので、親房卿は六月一日秀仲に命じ、書を白河親朝に遣して官軍の戦勝を告げ、且此機に乘し援兵を出して恢復を助くることを促がし、且七月十九日には陸奥岩瀬郡西方の廿一郷を給與して、出兵の資に充てさせた。併し優柔なる親朝は躊躇して出兵を敢てしなかつた。然るに廿三日佐竹義篤、吉原源藏人等小田城を襲うたが、春日顯時、小田治久等難なく之を撃退した。八月に入つて官軍の行動活潑となり再び駒城に據つて旗を揚げ、結城方面の賊兵を引受けて奮闘を続け、十一月に入つては親房卿令を國內の官軍に傳へ、諸方の賊に對して攻撃を開始した。仍て賊軍は暫く小田城を攻めることを見合せ、又もや駒城に力を集めたが、官軍は固守奮闘して屈しなかつた。二十一日秀仲又書を親朝に與へ、賊勢沮喪の色あるを告げ、此時に乗じて南北夾撃せば那須鹽谷の賊必ず破るべきを説いたけれども、親朝は依然出兵を決行しなかつたのである。

多賀郡の義徒 興國二年(二〇〇一)四月、多賀郡の義徒大塚員成等、使を小田に馳せ、錦旗を賜はつて、親朝の奥州勢が常陸に出陣するを俟つて之を揚げ、三方から賊徒を夾撃しようとする願出た。親房卿此請を容れて錦の御旗を與へ、且顯時の軍が近く佐竹追討に出陣の手筈故、速かに來會すべきを命じ、五月四日秀仲から此事を親朝に報じ重ねて出陣を促がしたのであつた。顯時の出陣は親朝の躊躇に由つて實現しなかつたが、當時常陸官軍の上下が局面打開の爲に必死に努力して居

た状況は略ぼ察せられるのである。

興良親王を小田城に迎ふ 親房卿は去延元四年以來既に三ヶ年に亘り、小田城にあつて諸將を督勵し、大業の恢復に心身の力を傾倒したのであつたが、高貴の公達を奉じて衆心を統一するの要を痛感し、此年の夏大塔若宮興良親王を吉野から小田城に迎へ、主將と仰いだ。親王は故大塔宮護良親王の王子で、母は親房卿の妹であり、先帝の御猶子として親王宣下があつた次第であるが、入城の時御齡僅かに九歳であつた。時に賊帥師冬は本營を瓜連に築き、國內並に武藏其他の賊黨を召集し、それ等を驅つて再び小田城に逼つた。而して此年に入つては奥羽二州、亦賊黨の勢漸く熾となり、鎮守府大將軍顯信以下の官軍も、自然苦境に陥るを免れなかつたのである。

師冬小田に迫る 六月十三日師冬は大椋高幹に命じ、志筑城を包圍して小田城後援の一角を塞がしめ、翌十四日自ら本軍を率ゐて筑波郡方穗庄に移り、營を玉取(大穗村玉取)に構へ、十五日三村山に陣して小田城を窺ひ、城後の寶篋塔峯に上つて城を俯瞰した。城兵出で、之を伐り、武藏の賊と戦つて之を追却けた。師冬の部屬尙山の西方高處に陣して城を見下し、且對城を小田周圍の各所に造り、與黨の參集を俟つて攻勢に出ようとし、城兵は機を見て猛撃を敵に加へんと構へ、兩軍睨み合の姿で數日を送つたが、形勢刻々に急迫を告げるのであつた。親房卿は此狀勢を重大視し、二十日及二十一日矢繼ぎ早に急使を白河に遣はし、小田城の安危は坂東の安危に係り、小田一たび陥れば東國官軍一時に解體せん、速かに軍を送つて此危機を救へと督促した。然るに白河へは小田

からの急使と同時に、靈山の顯信將軍からも瀧口公勝を使として援兵を求められた爲、優柔なる親朝は又々其處置に迷ひ、終に出兵を決行するに至らず、此事情を小田に報じて、出兵の猶豫を申出たのであつた。

四四

小田城兵賊を逆襲す 小田城の守備は強固であり、官軍諸城との聯絡は亦十分であり、且士氣は極めて旺盛であつた。而も無爲に日を送る時は賊勢次第に加はり、結局味方の不利となる。小田城の諸將は、此際奥州勢の來援を俟たず、賊の陣立の未だ整はざるに乘じ、一舉に痛撃を加へ、局面を有利に展開しようとする軍議一決し、六月廿三日敵陣に對し猛烈なる逆襲を敢行し、奮戦終日、賊は死傷千餘人に上り、總崩れとなつて對城に奔竄した。其後連日襲撃を試み、官軍の士氣愈揚つたので、賊大に懼れ、益城壁を修めて戰鬪を避け、對城を固守したのであつた。卿は廿六日僧宣宗に命じ、戰勝の始末を親朝に報せしめ、且親書を與へて、重ねて來援を促がしたのである。

官軍賊本營を襲ふ 志筑の益戸國行は、石岡勢の包圍を受けて半月に及んだが、小田の形勢に促がされて七月一日逆襲に出で、大椽高幹の陣を突いて多少の損害を與へた。かくて賊帥高師冬は曠日彌久戦はずして城兵を困しめ、且其間に調略を用ゐて官軍を分崩せしめようとの策略を廻らした。時に武藏の武士吉見頼武といふ者が、師冬に従つて賊軍中にあつたが、心中深く決する所あり七日賊營を脱し、手兵を抜いて小田城に投じ官軍に歸順した。城將等は頼武の報告によつて師冬等の奸策を悟り、今の中に賊の巢窟を覆して了はなければ、味方諸城は日を追うて財糧窮乏し、懼るべ

き結果に陥ることが明瞭なので、互に謀を合せ、八日小田、下妻、關三城から兵を出して師冬の本據たる玉取を攻め、顯時は別軍を以て賊砦の背後に廻り、期を尅して腹背から戦を挑んだが、師冬飽く迄固守して戦はず、終に無効に終つた。其後城兵の若森砦(大穂村若森)襲撃、賊兵の駒城攻撃等幾回か小競合が繰返されたが、形勢は依然として有利に進展せず、卿の期待は一に奥州勢の來援に繋げられたのであつた。

白河親朝の優柔 八月に入つて白河の親朝は僧道顯を小田に遣はし、近日中援軍を出す用意ある旨を報じて來た。親房卿大に喜び、道顯の歸るに託して、出陣の一日も早からん事を望む旨の書狀を與へ、親朝は亦重ねて僧惠紀を遣はし、出陣の方策を色々告げて來た。而もそれは卿をして只徒らに焦躁を重ねしむるに過ぎざるものであつた。親朝は小田城から寄せられた戦況危急の情報を累次披見して居たに拘らず、常總の一般形勢に對する判断は極めて樂觀的で、小田城の兵力並に其糧食は、尙向後一兩年間優に賊軍を支へ得ると見、而して彼自身は下野方面に於ける賊の内訌を豫想し、現に兩端を持する小山朝郷を味方に招ぎ、之と相呼應して起つに於ては、常總野は一舉して平くべしなど、漫然たる空想を描き、急速に小田救援を決行する意志を缺いて居るので、此方面からの援軍に一縷の望を繋げた卿の苦心焦慮は、實に想像の外であつたのである。

師冬小田領を掠む 此間に師冬の小田經略の畫策は愈辛辣を加へて來た。九月に入つて彼は小田城大寶城等を襲撃すると共に、別に手を小田領の府歳たる信太庄に伸ばして之を抑へ、土豪屋代

四五

信經を部屬として案内させ、手兵を分て侵掠を始めた。かくて彼は十七日佐倉砦（稻敷郡鳩崎村佐倉）を陥れ、やが伊佐津（柴崎村伊佐津）を渡つて東條庄を侵し、龜谷城を取り、轉じて河内郡の駒馬城（龍ヶ崎町）を陥れた。此策略は果して圖に中り、籠城中の小田主従に危惧の念を懐かしめ、治久を驅つて親房卿に對して二心を起さしむるに十分であつた。城中の士氣著しく沮喪し、主將苦悶の狀顔色に歴々たるを見て取つた親房卿は、愈茲に一大決心を固めざるを得なかつた。此時卿は急使を發して書を白河親朝に寄せ、城内窘迫の委曲を述べた後、次の如く訴へて居る。

『今日の成敗、唯卿が來援の一着にかゝる。自身出陣が出来なければ、子姪に兵を授け、海道、高野（久慈川上流の地）那須のいづれかへ出動させ、援助の形を見せて呉れるだけでも効果がある。十四五日も遅延せば城中必ず事變が起る。朝郷の歸順などは當にならぬ。如何しても援兵が出せぬとあらば、今の中親王を奉じて他へ移る外は無云々』

此時の卿の胸中眞に察するに餘りがあるでは無いか。

師冬治久を誘ふ 師冬の辣手は更に城内に伸された。彼は間者を縦ち、甘言を以て治久を誘うた。治久は愈變心し、潜に應諾の内意を通じた。卿は早くも之を覺り、二十二日出城の決心を固め書を親朝に寄せて意中を示した。

『此方の難義は、度々申送つた通りで、城内の異變愈發し、進退全く茲に谷まつた。一命を捨て、先皇に報じ奉るは、少しも厭ふ所が無いが、老臣の死後、官軍が如何に相成るかを慮つては、今

は死なれぬ。火急の場合、筆紙に盡されぬ云々』

悲憤慷慨の情紙上に溢れて居る。かくて治久の其後の態度、愈怪むべきものがあるので、廿六日長沼宗俊を白河に遣はして授兵を促した。

驅信小田を救はんとして果さず 鎮守府大將軍顯信は、靈山城にあつて小田城危急の報を得救授の兵を集め、十一月初常陸を指して進發した。時に陸奥の賊帥石堂秀慶之を三迫に拒ぎ、六日檄を相馬、岩城等の與黨に傳へて兵を徵し、防戦に努めた爲、顯信は遂に其目的を達することが出来なかつた。かくて十一月十日親房卿の一行は意を決して小田城を脱出したのであつた。

第六章 親房卿と關城及大寶城

親房卿等關大寶二城に移る 十一月十日小田治久は、策あつて講和すると稱し、賊兵の一部を城中に引入れた。兼て卿等が覺悟の事變が愈到來したのである。仍て親房卿は關城に、春日顯時は興良親王を奉じて大寶城に移り、秀仲以下親信の將士は兩城に分れて部署についた。秀仲が十二日親朝に寄せた書中に此始末を報じた後

『諸方への聞えも定めし穩かであるまじく、誠に無念至極である。併し小田は賊に降伏はしたけれども、合戦を好まざるに依つて此儀に及んだ次第であるから、後官軍の害はせぬことと思ふ。從

て貴方からの援軍さへあれば、師冬の黨類を退治するに格別の子細は無い。此際忠節名譽の爲、一大奮發を希望する云々』

と説いてあることに依つて、治久が疲勞困憊の結果戦を厭ひ、終に節を屈するに至つた状況や、親房卿以下官軍首脳部の不屈不撓の意氣の一斑が窺はれる。

治久師冬に降る 十六日治久は愈降参の意志を師冬に通じ、其條件として、食邑は之を削らざる事、官職は現在のまゝたる事、此二点が承認されるならば、招に應じようと申入れた。師冬は之に對し、詐て異議なき旨を答へたので、十八日治久は城を出て師冬に會見し、足利方の部屬となつた。然るに師冬は茲に至つて忽ち假面を脱ぎ、前約を反古にし、治久が朝廷から命ぜられた左近衛少將兼常陸介、兼常陸守護職を奪つて、北條氏の時與へられた宮内權少輔に復し、且其所領の大部分を削つて、僅かに十分一にも過ぎぬ地を與へた。治久初めて奸策に乗せられたと悟り、大に失望したけれども、事茲に及んでは今更如何とも爲し難く、快々として唯賊黨の爲すがまゝに任せ、之に屈從する外無かつた。小川の支城志筑並に同志笠間等も前後開城して、賊の手に歸したのであつた。

師冬兩城を圍む 十二月三日、師冬玉取の本營を發して關城に赴き、治久之に従つて村田に出陣した。八日師冬關城に迫り、其正門を壓して營を建て、尙一部隊を分派して大寶城の北なる寺山に置き、關大寶兩城間の通路を塞ぎ、且其從子三戸師親に、大平高橋等の部屬並常陸武藏の賊徒を授け、營を大寶城南の長峰に築かせようとしたので、春日顯時一條興信等、城兵を率ゐて出動、奮撃之を却け、即夜兵を移して寺山の賊營を襲うたが、此方は防備堅くして斫崩すことが出来なかつた。而も此日賊は下妻の族村田庄四保(紫尾村椎尾)城主四保駿河守を討つて之を降し、兩城を孤立に陥らしめ、徐ろに攻撃の鋒を集めて之に肉薄するのであつた。而して此時關東の中、官軍の守る所僅かに六城で、即ち關大寶の外、常陸に伊佐、眞壁、中郡、下野に西明寺で伊佐城は伊達行朝、眞壁城は眞壁幹重入道法超、中郡城は春日顯國、西明寺城は益子貞正之を守り、銳意奮闘したのであるが、悉く敵の重圍を受けて相互間の聲息隔絶し、唯孤城を堅守して、外援を待つの外無き窮境に曝されたまゝ、其年も暮れて行つたのである。

兩城間の連絡 師冬の官軍諸城に對する軍略は、長圍の陣形を取つて相互間の聯絡を絶ち、且糧道を斷つて内部から崩壊せしむるにあつた様である。關大寶兩城間は、寺山の賊營に依つて陸上の交通は全く杜絶されたが、湖上の夜間舟航によつて不十分乍ら聯絡は取れて居た。尙當時行脚僧の往來は案外に自由であつたものゝ如く、密使の任務には主として僧侶之に當り、諸國の同志間の聯絡には左して不自由を感じなかつたのであるが、唯車馬を通ずる様な道路には、哨兵を置いて日夜之を監視したから、武器や糧食を他から搬入するなどは、かく有力な敵の包圍を受けた場合、實に容易ならざる作業であつた。それには豫め城外の同志と謀を合せ、猛烈なる夜襲を敵陣に敢行し、其混雜に紛れて辛うして目的を達するので、此種の襲撃は爾來屢關大寶等の城兵によつて繰返

されたのである。

五〇

親房卿陸奥の出兵を促す 興國三年(二〇〇二)正月十四日卿は成田某を陸奥に遣はして顯信親朝の來援を求め、次で三月十一日卿並顯時から僧明王院、僧了哲等を遣はして親朝の至急來援を促がし、同二十八日更に急使を陸奥に遣はして顯信、親朝を促がした。併し顯信は賊黨の爲に阻まれて決行出來ず、親朝は例の通り優柔にして決心が立たなかつた。蓋し親朝のこの態度は畢竟其所領に關する危惧心に基くもので、既に先年尊氏の沙汰を以て其領中の依上保を削り、之を佐竹の族山入氏に與給した事實があつて、彼が官軍たる態度を明かにすれば、再び此覆轍を踏むことになるとし、義に依つて事を斷行する勇氣を缺ける彼は、親房卿累次の懇望にも拘らず、未だ一回も其望を充さなかつたのである。時に小田治久は賊に加はつて包圍軍中に在つたが、師冬の彼を遇する態度に極度の不満を懷き、密に城中に使者を遣し、罪を謝して歸順を約したが、後難を畏れてか、終に決行するに至らなかつた。併し彼は此後兵を陣中に置くだけで、戦闘に加はることは爲なかつた。

尊氏親朝を誘ふ 四月鎮守府大將軍顯信は親朝の子顯朝の軍を併せ、賊將石堂秀慶を三迫に討ち、七日九日二回に亘つて大に之を破り、秀慶終に砦を棄て、遁走し、官軍復振つた。顯信依つて此機を逸せず、常陸を援けようとし親朝の合力を促した。然るに此時は親朝が嚮に足利尊氏からの勸誘状を受けて進退に迷うて居た際であつた處へ、二十七日又々尊氏からの書状があつて、其れには武家方に降参すれば、領土官職總て現在のまゝとして保證するとあるので、目前の利益に思慮昏惑した彼は、終に顯信の提議に従はなかつた。かくして親房卿父子に恵まれようとした千載一遇の此好機も、遂に永遠に逸し去られたのである。顯信から三迫の戦捷を報じ、且近日親朝と共に出陣するとの旨を齎らした使者が、五月六日關城に達し、兩城の將士を勇躍せしめたのであつたが、爾來待てど暮せど奥州勢は姿を見せず、唯曉の夢の如く消え去つたのであつた。

兩城の苦戦 かくて又官賊兩軍の間に幾回かの戦闘が繰返され、城中では次第に糧食の缺乏を告げて來た。依つて親房卿は八月十八日九月十日兩回、重ねて僧を白河に遣はして、糧食と援兵とを促がした。十月に入つて親朝は金若干を關城に送り越し、且援兵については、小山との協力を口實にして、暫く決行の猶豫を望んで來たので、卿は十月十二日書を親朝に送り

『小山朝郷の態度の曖昧なのは、目前の利に迷うて賊に通じて居る爲で、今更道を説いて之を動かさうとも、所詮不能に終るべきは明かである。寧ろ此際奮起して先祖秀郷及父宗廣等の忠誠を繼ぎ王事に勵まば、鎮守府將軍の榮職に陞ることも容易であらう云々』

と諭し、其出兵を勸奨すること懇切を極めたのであるが、當の親朝其人が、既に賊黨に心を寄せ、擯斥した朝郷同様の立場になつて居たとは、神ならぬ親房卿の知る由もなかつたのである。

親房卿小山朝郷を誘ふ 親朝からの軍費は所謂燒石に水に過ぎなかつた。十一月子顯朝からも砂金十五兩を送つて來たが、之も同様忽ちに消え失せた。城中には餓の外に寒さが遠慮なく迫つ

五一

て来る。卿は萬一白河からの援軍を引出す端緒にもならうかと、小山の族藤井宗秀を小山に遣はして、朝郷に歸順出援を説かしめた。朝郷は親朝が出援するならば、共に援軍を出さうと約したので、卿は二十八日朝郷の意中を親朝に報じ、出援の決心を促がし、猶待ら切れず、十二月二十一日、僧宣宗を陸奥に遣はし將軍顯信並に田村、石川、白河等の諸族を遊説せしめたが、石堂等の賊勢尙強く、此企も遂に徒勞に終つて了つた。

尊氏再び親朝を誘ふ 興國四年(二〇〇三)二月、尊氏又々書狀を白河に送り、此際陸奥の官軍を撃つて功を立てるに於ては、建武二年以前の食色を全部元の如く給與しようとの勸めて來た、親朝の意益動き、最早義軍を起して祖先の光を増さうなどの熱は、殆ど全く消え果てたのである。

興良親王小山に移る 三月に入つて小山朝郷使を關城に遣はし、興良親王を其城に迎へ、之を奉じて義兵を擧げようとの願出た。これは要するに實行不能の條件を提出して、出兵を免るゝ口實としたものに過ぎない。親房卿は事頗る重大であるから、顯時等とも協議を重ね、容易に可否を決し兼ねた。時に親王は御年未だ十一歳の少年であり、連年の籠城に倦み果てゝ居られた際とて、仄かに小山から御迎の議を聞かれ、遽かに意を決して小山に走り、朝郷の館に投ぜられた。兩城では大に驚き、すぐ御跡を追ひ奉つたが及ばなかつた。而も茲に至つて朝郷は、擧兵の前約などは忘れたものゝ如く、依然日和見の態度を改めなかつた。

結城直朝敗死す 四月三日結城直朝が手兵を率ゐて急に關城を攻め、城壁に肉薄して一擧に之

を陥れようとした。關宗祐宗政父子防戦に努め、奮闘之を撃退した。直朝時に十九歳、血氣の勇に任せて深入りし、重傷を受けて遂に陣歿し、結城兵は首將を失ひ、柩を護つて一族結城に還り、直朝の弟直光が家を繼いだ。

賊軍の強襲 此月廿六日以來師冬は關城に迫り、兵を驅り野草を運搬して關城の塹濠を填め、別に礦夫數人を募り、横に地道を鑿り、樓櫓を築き柵を圍らして城兵の出入を監視し、かくして城の一面に通路を開き、精兵を驅つて一擧に城を強襲しようとの企てた。之に對して城中からも同じく地道を穿つて濠を埋めた野草を奪ひ、樓櫓の底を穿つて之を覆へし、且敵坑道の下を堀つて之を崩壊せしめた爲、敵礦夫は壓死を遂げ、師冬も終に其無益を悟つて之を中止した。時に偶々流言あり信州地方に義軍群り起つて、所々の賊黨を驅逐したと傳へたので、賊兵中之を聞いて畏をなし、懷郷の情に驅られて脱走する者續出し、賊勢大に衰へた。親房卿も此機に乗じ新に教書を下して岩城、岩崎那須等の諸族を勸説し、中には官軍に應ずる氣配を見せたものもあつたが、結局擧兵に至らなかつた。

守永親王關城に入る 嚮に大寶城から出した使によつて、奥州の田村宗季及其族穴澤成季から若干の金を贈つて來たが、此時になつて關城の糧食全く竭きた。之を聞いた伊達行朝は、伊佐城の糧を移して之を補給したが、之は僅に一ヶ月を支ふるに過ぎなかつた。かゝる間に五月一日守永親王吉野から下り、關城に入られたので、親房卿以下、城兵悦び迎へて關東の主と仰ぎ、士氣再び旺盛

になつた。親王は嚮に新田義貞等と越前金ヶ崎に立籠り、落城に際し皇太子恒良親王と難に殉せられた尊良親王の御子であらせられる。御叔父宗良親王と東海に御出陣のことは前に挙げた。かくて三日白河からの書状あり、諸將と議して近く援兵を出す考の旨認めあつた。卿は臣下範忠に返書を書かせて現下の窮状を報じ、速に兵と糧とを送ることを勧めた。親朝からは二十五日砂金七兩を齎らしたので、窮乏せる大寶城に送つたが、援兵は遂に來なかつた。

親朝賊に降る 六月十日賊將石堂秀慶書を白河の親朝に送り、尊氏からの書状を添へて降伏を勧めて來た。親朝は足利氏の法、降参者を處分するに土地官職等には手を加へぬといふ点を確かめ、愈降参と決心した。されば親房卿が滿腔の誠意を傾倒しての千言萬語も、最早や此優柔なる現實主義者を如何ともすることが出來ず、嚮に彼の希望に任せ、望を其將來にかけて、格外の詮議を以て彼を上總守護職に補したことも今は無駄となり、卿が自己の誠を推し、苦心慘澹百方手を盡して之を正道に導かうとした永年の努力も、親朝の落志弱行は遂に之を徒勞に終らしめたのである。

兩城陷る 關大寶兩城の官軍が、一縷の望をかけた白河の援軍も、かくして終に絶望に歸し、兩城の困憊は日を追うて甚しさを加へて來た。此間に師冬以下の賊軍は準備を整へ、八月二十三日を以て總攻撃を開始した。即ち大寶湖上には數多の大船を浮べ、陸には營を黒子まで建運ね晝夜間斷なく水陸を巡邏し、嚴に兩城間水陸の交通を遮斷し、一齊に兵を動かして兩城に攻めかけた。かくして兩城は聲息全く絶たれ孤立無援の下に惡戰苦闘を續け、終に十一月十一日、十二日兩

城相次で陥落し、關城主宗祐宗政父子、大寶城主下妻政泰等は壯烈なる戦死を遂げ、守永親王は陸奥に遁れて顯信の軍に入り給ひ、親房卿並顯時一行は遁れて吉野に引揚げた。師冬は此戦勝の餘威に乗じ、更に進んで伊佐城を攻め、伊達行朝亦力盡きて城を開渡して陸奥に遁れ、續いて眞壁中郡兩城も陥落して了つた。春日顯國は其親近の者と尙常陸に踏み留り、小田附近の山中に匿れて再舉の機を窺つたのであつた。

師冬京に還る 興國五年(二〇〇五)正月十三日、師冬書を白河の親朝に與へ、常陸諸城の逃兵が投降する者あらば、在所に捕へて其處置を執らしめた。常陸の敗兵は多く白河領を経て陸奥に走り、同國の官軍に合體した爲である。彼はかくして常陸平定の功を収めたので、二月兵を引纏めて武藏に引揚げ、國府で募兵を解散し、二十五日鎌倉に入り、同二月二日鎌倉を立つて京に歸つた。

春日顯國の舉兵 然るに三月四日春日顯國、姪信世と共に突如兵を筑波の麓なる三村山に擧げて同志を募つた。近くの小田治久は事情を知つたか否か之を看過した。顯國等は急馳して河内郡に出で、馴馬の沼田城(龍ヶ崎)を取つて之に據ると、賊將宍戸朝重手兵を率ゐる顯國等を追躡し、官兵のまだ集らぬ中、急に攻めて之を陥れた。顯國等は一時姿を匿したが、七日忽然として大寶城附近に現はれ、急に城に攻めかゝつた。此城は嚮に師冬が下妻政泰を滅ぼした後、之を収めて鎌倉の治所とし、役人數名を置いて没收地の政務に當らせ、世人之を下妻政所など稱へて居たのである。顯

國等は火を役所に縦ち、役人等を斬つて忽ち城を占領したが、火は八幡祠及僧房舎に及び、一帯を灰燼に歸せしめた。此時急を聞いた結城直光が、即日手兵を率ゐて城に攻めかゝつた爲、顯國以下少數の兵之を防ぎ兼ね、翌八日城陥り、顯國、信世等は賊兵村田政秀の手に捕虜となり、九日終に斬殺せられ、かくして常總の官軍は、此春日顯國を最後として全滅に歸して了つたのである。

東國官軍の没落

陸奥の北畠顯信は、其後守永親王を奉じて靈山及宇津峰の兩城を保ち、正平二年(二〇〇七)結城顯朝、相馬親胤等の賊軍と戦つて敗れ、一旦出羽に遁れたが、同六年(二〇一〇)又守永親王を奉じて兵を起し、伊達田村等の族が來屬し、陸奥國府に向つて進撃し、賊將吉良貞家等と倉本河、廣瀬河等に戦ふ中、尊氏が吉野に歸順の報を待て講和した。然るに翌七年(二〇一一)和破れ、吉良、結城、相馬等の賊來り攻め、暫くは宇津峰の險に據つて之を防いだ、翌八年(二〇一二)遂に敗れ、間もなく吉野に引揚げ、奥羽の地は全く賊の手に没して了つた。尙下野の西明寺城は常陸諸城没落の後も、山間の孤城に立籠つて官軍の命脈を維いで居たのであるが、正平七年大椽高幹が、畑田時幹以下同族の兵を率ゐて之を攻落し、此方面の官軍も終に一掃されたのであつた。

常總史上の親房卿

親房卿の常陸入國は延元三年で爾來此國に留まること滿五年餘、其間卿の苦心經營の跡は略ほ前に擧げた通りである。卿の企てた回天の事業は、時勢の非なりしが爲に、終に實現を見るに至らなかつたけれども、卿が小田、關の孤城に敵の包圍を受け乍ら、其經綸は關東奥羽の大勢を指導したのみならず、天下形勢の推移にも關與して居たので、身は常陸の邊境にあつても、儼として吉野朝廷の中心人物たるを失はなかつたのである。されば卿が在國五ヶ年間の歴史は、常總史中の最も光輝ある部分の一つであつて、是は一に卿の燃ゆるが如き忠烈の精神が宿り、永く後世を照すが爲に外ならないのである。卿は吉野に歸つて後引續き天皇輔弼の重任に當り、一身一家を擧げて興復に盡瘁し、正平九年(二〇一四)四月齡六十七歳を以て歿した。

守永親王の最期

常陸並に奥羽の間に轉戦して、具に辛苦を嘗めさせ給うた守永親王は、正平八年顯信と共に陸奥を退散せられたが、吉野には歸り給はず、越後の新田一族、信濃の香坂、遠江の井伊、駿河の狩野などいふ武士と謀を通じ、御自身は信濃國伊那郡大河原といふ山中に匿れ、新田義宗の子義則入道行啓等之を奉じて、皇威復興に肝膽を砕かせ給うたのであるが、長慶天皇の弘和元年(二〇四一)この事が知れ、京から討手が下り、小笠原以下の國人案内して大河原を攻落し、同國浪合といふ所で御自害になつたといふ。其時の辭世の御歌に

『思ひきや幾瀬の淵を遁れ來てこの浪合に沈むべしとは。』

親王は當時の歌人として御名を知られ新葉集に御歌が見えて居る。左に其中から二首を掲げる。

『現には逢ふ夜も知らず思ひねの、夢こそ人の契なりけれ』

『斯はかり憂きに耐へてもあるものを争て昔を恨みきつらむ。』

正家顯時の最期

嚮に瓜連城に據つて佐竹の大軍と戦つた楠木正家は、陸奥に去つた後鎮守府

終

